
繋がれた手 Beautiful day, beautiful life

Glacier

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

繋がれた手 Beautiful day , beautiful
l i f e

【Nコード】

N9724F

【作者名】

Glacier

【あらすじ】

胃に穴が開いた。もちろん、大出血を起こして僕は入院。億劫で憂鬱で退屈で……そんな入院生活中、僕はとある女の子に出会った

Prologue 病気と出会いと運命と

僕は元々病気がちな子供ではなかった。いや、というより健康だった。毎日友達と運動場を走り回っていたし、幼稚園、小学校、中学校、そして今までと皆勤賞だったぐらいに健康だった。

別にこれは自慢でもなんでもなく、ただの事実として捉えてもらえれば幸いだ。病気がちな人にとって、それは羨ましいことだろうしね。

その反動が来たのだろうか。僕は現在、重病患者用と呼ばれている病棟にいる。

正直に言うと、何で僕がこんなところにいるのか、自分でもさっぱりだ。記憶が途切れる前、最後に残っている記憶はテーブルに並ぶ麦茶やハンバーグなどのご馳走、久々に帰ってきた姉ちゃんの顔。そこから先、僕の記憶は闇のベールに包まれている。

ではその空白の数日何があったのか。目覚めてみて、姉ちゃんから聞かされたことはおっかなびっくりすることだった。

『胃に大きな穴があって大出血したんだよ。もし手術が遅れてたら死んでたってお医者さんに言われたぐらい危なかったらしい、あんた』

そんなことを言われても、僕は何のことかさっぱりなのだった。当事者なんだろうけど、仕方ないだろう。何せ、記憶がないんだから。

まあ、たしかに前々から調子が悪かったのは事実だ。気分はとてつもなく悪いし、お腹は痛いし、体は熱いし……。何故病院にいかないという話になるけど、うん、率直に言っただけ嫌いだからだ。そうとしか言えない。

バカだと思える。ああ、自分でもそう思えるさ。でも、嫌いなものは仕方ないじゃないか。この病院独特の匂いも、雰囲気も、白衣も……とにかく何もかも嫌いだったんだ。

とそんな成り行きで、僕は今病院で休養を余儀なくされていた。
一応、学校の友達が色々と持ってきてくれるけど、どれもこれも僕にとつてうれしいと思えるようなものではなかった。

例えば、授業を受けることが出来ない僕のためにわざわざ僕の分まで書いてくれたルーズリーフやら、授業で配られたプリントやら……。

とにかく、気の利くようなものは何一つなかった。マンガの一冊や二冊持ってきてくれたっていいじゃないか。

友達の優しさには涙さえ流せそうだが、その気の利かなさにも涙が流せそうなほどだった。

嫌いだらけのこの病院中でも一番苦痛なのが、食べ物だ。

術後一週間は飲食禁止。

きっぱりと言おう。

地獄だ。

術後、眠り続けていた僕はとにかくお腹が減って仕方なかった。
起きてすぐに血眼になって辺りの食べ物を探したぐらいだ。

やがて看護師さんが来て、僕が目覚めたことに気づくとナースコールを大慌てでプッシュ。驚きを混えた声で「想弥君が起きました！」と連絡すると、すぐに医師が、少しして姉ちゃんがきた。

ちよつとした医師の検査が終わり、わけの分からない説明を喰らった後に、後四日は最低でも飲食出来ないと言われた。

その言葉が耳に流れこんできたとき、僕の表情は瞬間冷凍されたことは言うまでもない。

その際、愕然とする僕に姉ちゃんが言ったことは今でも僕の心に根強く残っている。

『自業自得ね』

ため息まじりのその言葉に、僕は憤怒した。……憤怒したんだけど、情けないことに全くその通りだったので何も言えなかった。

不幸中の幸いというべきか、意識がやけにはつきりとしていて元気そうだったために、すぐに面会謝絶のお札は取られた。いや、医

師すらも驚く回復っぷりだったらしい。

飲食禁止の宣告を受けて三日目、ようするに絶食を始めて六日目。僕は空腹を紛らわすためにボーツと夜空を見ていた。街が明るいため輝く星は少ない。月すらも霞んで見える。

闇空を穿つ白い月を眺めながら思った。僕はやっぱり不幸なんだろうな。

だって、娯楽もないし運動も出来ない。挙句の果てには友人は食べ物とプリント類しか持ってこない。

そこに悪意は全くない。ああ、清々しいほどにない。しかし！だからこそ憎く見えてしまうことだってあるということがあるんだ。

「はああ」

また一つ僕の貴重な幸せが減った。

だけどため息というのは最早自然現象で、致し方ないことだと思う。出てくる涙を止めるといふのと同じだ。

第一に、今僕は不幸の真っ只中じゃないか。

点滴という名の鎖に縛られ、病院というオりに監禁されている…。

僕は暗い空を眺めるのを止めた。冷たいタイルの廊下を病室に戻るために歩き始める。

点滴棒の転がるカラカラという音が深夜の病棟に寂しくこだまする。そのせいで、ただでさえ儂く感じられるこの場所が余計に儂く感じられた。

儂く感じる理由は、なんとなく自分の中で理解している。

多分、ここが灯火の多く途絶える場所だからだろう。

もしかしたら、これこそが病院嫌いの本当の理由なのかもしれない。

そう考えると、憂鬱な気持ちに余計に憂鬱になった。

早く寝よう。そう思い、俺は個人病室のドアを勢いよく開いた

出会い、というのは人それぞれで、また運命というのも人それぞれだろう。

運命なんて、そんなロマンチックな言葉を僕が使っているのかわからないけど、今思えばそれは実能的を射た言葉だと僕は思う。それは間違いなく、僕にとっての人生の転機だった。

「あなた、誰？」

少女の目が僕の目を、体を、心を射抜く。

透き通るような声。その声に、思わず僕は身震いしそうになる。

「え、と……想弥。刀根想弥、です」

よせばいいのに、間違ったと謝って帰ってしまえばいいのに、僕はその質問に答えていた。

きっと、眠さのせいであんなにかしていたのだろう。ああ、きっとそうに違いない。

こうして、僕達は出会った。

…… Prologue 病気と出会いと運命と

Chapter 1 日々の変化 / 1

Chapter 1 日々の変化

/ 1

目を覚ましてもそこは昨日見た天井。僕にテレポーターションなんて特殊な力が備わっているわけもなく、また人一倍の治療能力があるわけでもない。後者の方はなかなか普通にありそうなものだが、ないものはないのだ。仕方ないじゃないか。

同時に、過去に戻って自分の過ちを阻止することも出来ない。耳を食べられた猫型ロボットでもいてくれたらどうにかなるんだろうけど……。

結局、昨日は自己紹介した後、「ゴメンナサイ！」と悲鳴じみた声で謝って逃げるように自分のベッドに潜り込み、吸い込まれるようにして眠りに入った。

自分はバカだきつと明日になったら忘れてるさ、なんて暗示もかけてみたけど……うん、一応これでもまともな人間である僕はしっかりとこの記憶が脳に刻まれていた。

ああ。単語一つ覚えるのに最高十分かかった僕が、なんであんな余計なことは覚えているんだろう……。

「はああああ」

深いため息をつく。ああ、またやってしまった。ここにきてこればかりだ。

と、ここで病室のドアが急に開いた。まさかと思い、バツと頭を上げてドアの方を見る。

「ど、どうかしたかなー？」

そこには今日の僕の担当なのであろう、看護師さんの小早川明菜こはやかわあきなさんがいた。

まず男なら誰もが目の行ってしまつような整った顔立ち。少し長めの髪はポニーテールにしてまとめ、優しげなクリクリとした目をまつげが綺麗に縁取っている。

そして忘れちゃいけない。とどめにナース服。男のロマンだぜ、ばきゅーん。

若くて美人で優しくてフレンドリーで……男性入院患者からかなりの人気を誇る看護師である。新米の頃から手際がよかつたらしく、看護師になって三年目の今でも未だに注射を血管から外したことがないらしい。

僕が驚いた様にしていたためか、彼女もビツクリした様子だった。

は、はははは……。

バカバカしい。僕は一体何を警戒しているんだ。

「いえ……ちよつといろいろあつたもので」

「ふーん」

ニヤリと、小早川さんは笑った。

……不吉な笑みだな。

一体何だつて言うんだ？

「あの、どうかしました？」

「いやいや。君も若いからね。羨ましいよねー、ホント」

からかうような笑みを浮かべたまま意味深な言葉を並べていき、「血圧を計るよー」と言つて血圧計を僕の腕にセットし始めた。

いや、ちよつと待つてください。あの、どういふことですかそれ。それを聞くと墓穴を掘るような気がしたので、僕はどうにか聞きたいのを堪えた。

ちらりと窓の外が目に入る。

僕は話題を逸らすことにした。

「昨日はあんなに晴れていたのに今日はどんよりしてますね」

「そうだね。嵐でも来そうな予感が私はするな」

……。

思わず黙り込む。

血圧計が僕の腕を締め上げていく。同時に、胃も締め上げられている気がした。

何てことをするんだ、全く。また穴が開くじゃないか。しかし、教えてくれそうな様子は皆無。

「あ、あの」

だから思い切って、僕は聞いてみることにした。

「俺がやらかしたことって、もう結構広がっちゃってたりするんですか？」

「なーに？ やらかしたことって」

意地悪っぽく、っていうか真正銘の意地悪な笑みを浮かべて小早川さんは言った。

ちろちろと僕の方を見るのは、やはりあのことを知っているのだろう。

……具体的に言えと。

何と性格の悪い看護師だ。

「昨日、俺が間違っ隣の子の病室のドア開けちゃったことですよ」

不承不承、僕は言う。

昨日見た少女を思い浮かべる。でも、薄暗い病室で見えたのはあの強い輝きを持つ目だけで、あとはあの声ぐらいしか思い出せない。忘れようとすればするほど彼女の存在が大きくなっていくのが自分でも分かった。

まだ大した関わりもないのに、僕はあの女の子が気になって仕方なかった。僕は自然とそれに恐怖に似た感情を抱く。

そんな気持ちもいざ知らず、僕の言葉に小早川さんは満足そうに頷き、わざとらしく「あーそのこと」なんて言うとうまく答えてくれた。

「まあ、そんなに広まってはいないけど知ってる人は知ってるって感じだよ。でも裕香ちゃん、昨日小谷さんに話してたらしいからすぐ広まるんじゃないかな？」

ぶしゅー。そんな間の抜けた音を立てて血圧計の締め付けが緩む。だが、胃の痛みはさらに強くなった。

「どうやら、あの女の子はゆづかというらしい。」

「昨日って……今日のことですよね？」

「ああ……うん、そうなるね。あの娘、夜遅くまで起きてるからさ、寝なさいよって言いに行ったら言われたんだって。普段あまり喋らない子だから、小谷さんもビックリしてたよ」

「……………」

「ああ。」

「あああああ。」

もうダメだ。僕の人生は終わりだ。

きつと変態と思われてるんだろう……。最悪だ。

確かに口クナ人間じゃないかもしれないけど、さして酷いことなんて今までしたことない。

僕が頭を抑え、うめき声を上げながら枕に突っ伏している間に、手際よく空っぽになった点滴の袋を満タンのものに変えていく。

再び頭を上げるまでにはその作業はすでに終了していた。

更には目の前に体温計まで差し出されている。

「はい、お熱計ってねー。それとも看護師さんがやってあげようか？」

「子供扱いしないでくださいよ、小早川さん」

あまりの扱いの酷さに殺意すら覚える。僕はそれを苦笑いで表すというハイレベルな技をやってみせた。

これだと相手に殺意を抱いていると悟られることもない上に、胸の中をさらけ出せる。

一石二鳥の素晴らしい手段だった。

「でもさ、丁度いいと思うんだよね」

「丁度いい？ 何がですか？」

「彼女、君より一個したの年なんだ。ちょっと体調が悪くてね、田

舎のほうから転院してきたの。もう三カ月も前からここにいて、知り合いとか誰もいないでしょ？ だから話し相手とかいないみたいで、いつも暇そうにしてるのよ、裕香ちゃん。

だからさ、このまま友達になつてあげてくれないかな？」

「そんな年じゃないんじゃないですか？ 俺、来年もう高校三年ですよ？」

「高校二年の子は友達を作っちゃいけないのかしら？」

「いや、そういうことじゃないですけど……」

「彼女でもいるの？」

「……………」

「じゃあいいじゃない」

小早川さんは笑う。屈託なく、天使の顔をして。わざと来年高校三年になると言ったのに、わざわざ高校二年と言い直すところも意地悪っぽい。

悪魔め。

入院四日目　実際は七日目なんだけど　にして僕はついに彼女の本性を知った。

天使の皮をかぶった悪魔だ、この人は。

でも、三ヶ月か……。

「長期間ですね。その、裕香さんって方」

何気なく言つたつもり言葉だった。が、小早川さんの顔が一瞬曇った。

僕はそれに気づかなけりやよかつたのに、見逃すことはなかった。

本当に、僕は損な奴だ。

ある衝動にかられる。止めておけ、そんなことするな。そう自制してみるが、衝動はそのひ弱な自制をいとも簡単に破った。

「相当、重いですか？」

僕は聞いた。ダメだ、これ以上深入りするな　そんな警告が脳内に出される。しかし、なかなかブレーキをかけることが出来ない。

スピードメーターは減速するどころがむしろ、加速しつつあった。そんなとき。

体温計が測定終了の合図を告げた。軽やかなリズムの機械音がなる。

「終わったね。それじゃあお姉さんに体温計を見せてくれるかなー」
「あ、はい」

目の前に、体温計という壁がそびえ立っていた。僕は全速力でそれに激突。そうして撃沈した。

まあ、ようやく止まれたんだ。

結果オーライだろう。

「ん。熱はもう平熱だね。この調子なら退院も早くなりそうだよ」

「それは良かったです」

本当に良かった……。

早くこの牢獄から抜け出したい。

僕はさっさと退院しようと思っただけで決意して頷いた。側で小早川さんが不思議そうにそれを眺めていたのは、言うまでもない。

予定していたページ分を終え、僕は問題集を閉じた。

僕も一応、来年から崖っぷちの受験生である。入院中であるとはいえ、勉強もそこそこにしておかないと危ない。

親切な友人が度々授業のノートやプリントを持ってきてくれるから、授業の遅れもそこまで大きくならず済みそうだ。

そんなことを考えると、どうしても脳裏にプリント類と一緒に持ってこられた食べ物が脳裏にちらついてしまう。

僕は食べ物のイメージを消そうと頭をぶんぶんと振った。

少し疲労感を感じ、今は何時だろうと壁に掛かっている時計を見ている。すると針はすでに午前十一時を指し示していた。

勉強を始めてから二時間近くが経っている。

集中すればあっという間だな、そう思いつつ僕は背伸びした。

続いて大きく体をひねる。コキコキと腰の骨がなった。うん、今日も絶好調だな。

人間の限界であろう位置まで体を捻り、もうならないことを確認すると僕はベッドから出てスリッパを履いた。毎日の日課である病棟内の散歩だ。体を動かさないと脳はよく働いてくれない。まあようするにストレス発散というやつである。

カラカラと点滴台を転がして部屋を出る。

昼間だというのに廊下に人は誰もいなかった。キョロキョロと辺りを見ると、先の方にあるナースステーションの方で看護師さんたちが忙しそうに働いているのが目に入った。

「大変そうだな」

誰が見ても思っような、本当にくだらない感想を口にしたところで僕は歩き始める。もちろん、カラカラという音もついてくる。

そこで、気づいた。

『白鞘裕香』

隣の病室のネームプレートに。

ゆづかってこう書くんだ。名字は……しらさや？　しらさや？
何て読むんだろ？

僕はしばらく思索し、そこに立ちつくしていた。

どれくらい経っただろうか、点滴台は動かしていないはずなのに
不意に後方でカラカラという音になる。振り返ってみると、隣で台
車を転がしながら看護師さんが不審げに僕のことを見ていた。

愛想笑いを浮かべてみる。するとどうだ、看護師さんの目の色が
さらにマズいものになった。僕はその視線から逃げるように、慌て
て歩みを始めた。

人気のない廊下を一人で行く。最初は違和感を覚えたはずのこの
空疎な感覚に、段々と慣れつつある自分が少し怖い。

窓越しに東病棟の方をしてみる。やはり、あちらの方はこちらよ
り多少活気があるよう見えた。

この病院は県一番の大きさを誇る総合病院で、西側と東側に病棟
が分かれている。東側は普通の病室で、数人が一つの部屋で一緒に
入院している。一方の西側は個人病室で、部屋を一人で独占できる
素晴らしいところだ。

大抵、軽めの病気の人が東病棟で、重病患者が西病棟となってい
る。稀にあまり重くない人も西病棟にくるが。余程リッチなんだろ
う。

患者も医師も西病棟とか東病棟とか呼んでいて、明確な区切りが
そこでされているのだった。

そういうわけで、僕は西病連にいる。余程危険だったであろうこ
とがそのことから伺える。まあ、今ではこうやって散歩できる程に
まで回復しているわけだが。

往復すると結構長いことがよく分かる。一往復するのに五分はか
かるほどだ。

この字になつてゐるため、最初に散歩したときも迷うことはなかった。簡単な作りなのは患者にとつてもありがたいことだ。

東病棟に行くと、途中で看護師さんやご老人とすれ違ふ。僕はいつも、適当に「こんにちは」とか挨拶を交わしながら歩いてく。

ぼんやりとしながら他の患者さんを見ていくのもこの散歩の醍醐味である。赤ちゃんが元気よく泣いていたり、おじいちゃんのがほんと外を眺めていたり、とにかくいろいろな人がいる。

やっぱり、多少元気のある人がここは多い様だ。昨日も確かめたんだから間違いないだろう。

そんな風にのほほんと散歩をしていると、後ろから声がかかった。当然の反応として僕は振り向く。すると僕の頬に指が刺さった。どうやら僕が振り向くのを予想して、あらかじめ指を予想ポイントにセットしていたらしい。

「痛いじゃないですか、小谷さん」

「痛いじゃないですか、じゃないですよ。刀根さん、自分が胃に穴が開いて三日間意識が戻らなかつたって自覚あります？」

小谷さんは顔をしかめて言った。僕はお茶を濁すように「ええ、まあ」と曖昧に答える。

そんな僕に小谷さんは小さくため息をつく。

「胃にあれだけ大きな穴開けといてよくピンピンとしているもんです。本当は穴なんて開いてなかつたんじゃないんですか？」

「そうですね。俺もビツクリですよ。まさか穴が開いてたなんて……まあ確かに今も痛いんですけど」

「だつたらなんでゆつくりしてないんですか」

呆れるように言う小谷さんに、僕は「たはは」なんて笑つておいた。

小谷さんはフルネームを小谷小春こたにこはるという。一応僕を大人の仲間と見てくれているらしく、ちゃんと敬語を使つてくれる。

小早川さんとは大学からの付き合いで仲がいいらしい。ナースステーションとかで仲良さそうにおしゃべりしているのを僕もよく見

かける。

ちよつと乱暴に切ったようなショートカット。意思の強そうな黒い目に横一文字にキュツと結んだ唇。そしてもちろん、ナース服。こちらは美人と言うよりかわいい、といった顔で、そんな顔に似合わずとにかく厳しい……。あまりの厳しさに小早川さんですら僕に愚痴をこぼすほどだ。

「テープが無駄に長い」とか「サボらないで」とか「テキパキやっつてよ」とか。

とにかく厳しいらしい。

というより、うるさいらしい。

まあ、それでもとても人がいいから信頼は厚いようだ。

ただ几帳面なだけなんだろう。

「毎日毎日病院を歩き回って何をしてるんですか、刀根さんは」

「いや、勉強をしているとどうも体を動かしたくなるんですよ。ストレス発散、ていうんですかね」

「あ、そういうえば刀根さんは来年受験生だっけか……」

しみりとした口調で、彼女は言った。

意味ありげなその口調に僕はひそかに眉をひそめる。

それに気づいたのか、小谷さんは慌てて謝ってきた。何故謝る、というツツコミは一応堪えておく。

「そんなに珍しいですか？ 受験生なんてどこにでもいると思いませんけど」

「そういうわけじゃないですよ。ただ、ね」

小谷さんは何故か言うのを渋った。

普段の僕ならなんだろう、と思うところだが、今日は違った。小早川さんとの会話の違和感とその理由だろうか。

脳裏にちろちろとあの少女が出てくる。

「裕香さんですか？」

「……………」

無言だった。

どうやら凶星らしい。

僕は呆れるのを通り越して笑ってしまった。何でこうも看護師なのに隠すのが下手なんだろう。

頬を指された腹いせ、なんかでは全くもってないが、僕は笑って少し意地悪を試してみる。

「もうちよつと隠すなら上手にならないといけないんじゃないですか、小谷さん」

「うるさいなあ」

キョトンとなる僕。ハツとなる小谷さん。一瞬、素が出てしまったらしい。

ニヤニヤとした笑みを浮かべる。頬を少しだけ赤く染めて、小谷さんはわざとらしくコホン、と咳払いをした。

そうして、窓の外を見た。

どことなくその顔は寂しそうに見える。いや、悲しそうという形容が正しいかもしれない。

じっとその横顔を眺めていると、やがて彼女はそのやけに重々しそうな口を開いた。

「彼女、昔は結構名の通ったスプリンターだったらしいんですよ。だけど、もう走れないんです。それって酷いと思いませんか？」

「走れない？ 足でも故障したんですか？」

スプリンターが酷使しすぎて足を壊す、という話はよく聞くことである。

確かにそれは可哀想だ。大抵そういう人は走ることが生きがいだろうし。

しかし、小谷さんは違うと首を振った。

「色々あるんですよ。色々、ね」

「はあ。色々ですか」

「……あたしっしたら何を言ってるんだろ。ごめんなさい、本当に一生のお願い。忘れて。アカの他人にこんなことを話したりしたら首になっちゃう」

「そんなこと言われても……。人間、都合の悪いように出来てるっていうのは知ってるでしょう、小谷さんも」

そう言っ僕は首を竦めた。

忘れられるなら僕も忘れたいよ。

「ですよね。……じゃあ、他言無用でお願いします」

両手を合わせて頼んでくる小谷さん。どうやら本当にまいているようだ。

僕は分かりましたと頷いた。ここで断る奴がどこにいるだろうか。

恩に着ます、なんて重苦しい言葉を残して彼女は戻っていった。

その背中を見送り、見えなくなった頃に僕は窓の向こうを見た。

街は雲の色を映したように白に染まっている。

雪が降っていた。

冬休みに入る一ヶ月前に僕は入院した。経緯は知っての通りだ。入院予定は六週間。約一ヶ月半。

どう足掻いてもこれが早めの冬休みになってしまうのは明白だった。

まあ、どうせ塾にも入ってないし、模試では志望校でB判定をもらっているからそこまで不安ではない。

と言ってもその志望校は一流からは程遠い、二流大学だ。たまーにちらつと耳にする程度の、無名の大学。

頭はまあ悪くないって感じで、僕の実力でいける中の最高の学校である。

地元にあるというのも魅力の一つだ。

僕は実は地元に対する思いが強く、離れるつもりは全くない。

他の土地に行くのは嫌いじゃない。むしろ好きな方である。しかし、住むとなると話は別だ。絶対に嫌だ。

多分、僕は臆病なんだろう。

自慢じゃないけど、以前に一度だけ女の子と付き合ったことがある。

男子内でも評価が高い、人気のある子だった。言っておくが、向こうの方から告白してきたのである。自慢じゃないぞ、うん。

彼女は積極的にデートに誘ってきたし、キスも迫ってきた。だけど、僕はそれを全部断り、拒んだ。

他人のことに深く入り込むのが嫌だったのだ。

僕もそれなりに彼女のことが好きだったけど、それでも怖かった。何が怖いのか、という疑問には僕は答えられそうにない。自分自身のことではあるんだけど、よく分からない。

結局、一週間で別れた。つまらない、と言い捨てられてフラれた。納得はもちろんしているし、仕方ないとも思う。原因は全部僕にある。

友達はみんなお前はバカだという。お前にはもったいないぐらいだったのに、という暴言までくれた。

僕はそんな罵倒が飛び交う中、「俺とは釣り合わなかったんだよ」と言いながら友達と笑い合っていた。

それ以来、僕の女子からの印象は最悪である。当たり前前の反応とはいえ、少し凹んだ。

「よ、元気そうだなによりだ」

そんな声でルーズリーフの上のシャーペンがスケートを、暴走する僕の脳が思考を止めた。

問題集から声の主へと目をやる。

「また食べ物持ってきてないだろうな、新沢にいざわ」

僕がひとまず来訪者の手に握られているビニール袋を見て苦々しくそう言つと、そいつは軽快に笑った。

この軽快そうに笑う奴は僕の小学校からの友達だ。下の名前は智と樹もきと言つが、滅多に智樹と呼ばれることはない。

「冗談じゃないんだぜ？ 滅茶苦茶腹減つてんだからな」

「人の好意を踏みにじりやがって。最悪だよお前」

「俺が悶え苦しむ様を見て喜んでたお前が言うな」

「あははは。それもそうだな。で、どうよ勉強の方は？ 一応、今日もプリントと授業の内容を持ってきてやつたぜ」

「ああ。サンキュ、新沢」

「退院したら何かおこれよ」

僕は嫌だと答えた。瞬間、笑いながら新沢が殴ってきた。僕はそれを間一髪で避ける。

目の前で風を感じる。それ程威力はなさそうだったが、やはり当たったら痛かったに違いない。

「何しやがる。俺は病人だぜ」

「お前やっぱ最悪だよ。これだけやってやってんのに何もおごらな
いだと？ 欲しいもの、たくさんあるんだぜ？」

「お前見返りが目的でやってんならこんなことすんなよ……」
呆れてもう声も出ない。

僕は再び問題集に目を移した。

すぐに脇腹を突かれた。

「何すんだよ、痛いじゃんか」

「お前、俺がお前のためにどんだけ頑張ったのか分かってんの？」

「知らねー」

「死ね」

そんな残酷な言葉と同時に手刀を繰り出してきた。今度は何せ不
意だったため、避けることが出来ずに脳天に直撃する。

意外と威力があり、ぐわんぐわんと視界がブレる。

「俺は病人だぞ。しかも死にそうな奴にそんな奴に死ねとか言うか普通」

「知るか」

「全く、お前は本当にとんでもない奴だよ」

「お互い様だろ、刀根」

「まあな」

そんなやりとりに僕達は笑った。クスクスと、愉快げに。そうし
て持ってきてもらったプリントとルーズリーフに手を伸ばす。

さっきでこそあんなことを言ったが、僕はちゃんと新沢に感謝し
ている。

こいつだって来年受験生になる身である。それもこいつの志望大
学は一流のもの。本当なら僕と戯れてなんかいないで勉強しないと
いけないのに、僕の面倒を見てくれる。その見返りと言っちゃなん
だけど、いつも愚痴をたれる。

ある日は先生や友人の愚痴を。

ある日は恋愛に関する愚痴を。

ある日は模試の点数の愚痴を。

ある日は僕に対する愚痴を。

正直うるさいんだけど、こうして来てくれることはそれでもうれしい。

こんない奴は、多分いない。いたとしても、それは絶滅危惧種みたいに少ないだろう。

僕はそんな奴と親友になった。

「何だよ、ニタニタとキモい笑みを浮かべて」

俺の視線に気づいたらしく、そんなかわいくないを言ってくる。

「何でもない。確かにプリント三枚とルーズリーフ四枚は頂戴した」

「うん？ プリント何枚つつた？」

「だから、三枚だろ？」

俺は手にあるA四サイズの紙の中でも機械的な字が書かれたものだけを差し出す。ぱつと見ても三枚しかないと分かるのに、新沢はそれを数え出す。

一、二、三……。

何度数えても変わらない。当然だ。そう簡単に世の中の物理法則が変わってもらっちゃ困る。

僕がしらーっとした目で見ていると、ぱつが悪そうに新沢は頭を掻いた。

「んー。わり、数2のプリント忘れちゃったみたいだ」

「了解した。明日持ってきてくれよ」

「明日か。すまん、明日はちょっと無理だ。塾で模試があつてさ、今回でBとっておきたくてよ」

「あー……そうか。じゃ、今度来るときにでもよろしく」

暗い話題になりそうだったので、素早く僕は話の流れを切った。

新沢は無理をして自分の力より少し上の大学に行こうとしている。彼は地元から離れたいよう、ここみたいな中途半端な都会じゃなく、東京や大阪みたいな大都会に住みたいと言っている。

僕からしたらそれは考えられないことなんだけど、人それぞれだ。「そついやさ、この看護師さんって結構美人な人多くね？」

話題が半回転した。

声色がとても嬉しそうだ。……目的、俺の見舞いじゃなくてそっちだったんじゃないか？

「ああ。まあ、確かにね」

「羨ましいなあ。毎日ナース服着た綺麗な姉さんが『大丈夫ですか』なんて言ってきたくれるんだろ？ たまんねー」

「変態」

とは言うものの、ナース服に反応する新沢に僕はシンパシーを感じるのであった。

どうやら変態という肩書きが心外だったらしい。新沢はいちいち言い返してくる。

「うるせえ」

「否定しないってことは認めてはいんのか」

「うぐっ……」

「自分のことを理解している奴は少ないからな。お前、結構凄い奴だよ」

「お前、すごい嫌味ったらしく聞こえるのは気のせいかな？」

「気のせい気のせい」

こいつの批難してくる目は昔から変わってなく、少し拗ねた様な顔になる。

俺は小っさい頃を思い出して笑った。今でこそ真面目な優等生として通っているが、昔は相当無茶をやらかしたものだ。

「昔が懐かしいな、刀根」

同じことを考えていたのか、新沢が外を見ながらそう言った。

僕は「そうだな」と頷いて同じように窓の外を見た。

異常気象らしく、十二月の手前だということにも関わらず外では夜を雪が白く染めている。

久しぶりに見た雪は勢いがなく、降り積もりそうになかった。

そんな沈黙の中突然、感慨深そうに新沢は口を開いた。

「覚えてるか？ まだガキの頃にさ、真冬にどっちが先に音を上げるかとか言って上半身裸で外で震えてたの」

「あー。あの我慢大会だろ？途中でギャラリィから雪が飛んできてギャーギャー言ってたよな」

「翌日思いっきり風邪ひいたよな」

「そうそう。親にこっぴどくしかられたよ。両親共々キレにキレてさ、三十九度の熱だしてるっていうのに一時間ほど説教喰らったよ。しかも正座で」

一瞬、あるワードに新沢は顔をしかめた。が、僕がクスクスと笑ったからか、つられるようにして一緒にクスクスと笑った。

弱々しい雪を見ながら、僕は穏やかな口調で言った。

「バカだったな、俺達」

そうだな、と新沢も首肯する。

「もうそんなバカなこと、出来ないんだよな」

「そりゃそうだ。ていうか、もうやるうとも思わねえよ」

「だな」

「だろ」

昔話を語ったところで新沢は時計に目をやった。長針はいつの間にか七時をちよつと過ぎたところを指している。新沢が来たのが六時頃だったので、かれこれ一時間近く話していたことになる。

やばつ、と呟く新沢をじいと観察しながら僕はしみじみとした思いにふける。

後一年しかない。一年後には全てが終わっている。

もし浪人することがなければ新沢は東京へ行き、今のように簡単には会えなくなるだろう。

それはとても望ましいことなんだけど、すこし残念なようにも感じる。

時間はとまらない。正確なリズムを刻んで進んでいく。

僕等はその有限を、約十一年間一緒にいた。

新沢が立ち上がった。そうなる僕が新沢を見上げる形となる。

が、僕はわざとそうせず、手元のシャーペン目を向けて聞いてみる。

「なあ、新沢」

「あん？ 何だよ」

「俺達、離れても友達だよな」

「どうしたんだよ改まって。気持ち悪いな。それじゃあ帰るぞ」

新沢は恥ずかしかつたのだろうか、そう言っただけじゃあんとした答えを返さなかった。

そうだな、と僕も同意する。すると新沢は軽快に笑い、片手を上げて足早に帰っていった。

僕はしばらく新沢との会話の余韻にひたつた後、再びルーズリーフにシャーペンを走らせた。

志望校の過去問とセンター試験五年分の問題を解いていく。漢文古文現代文数学1数学2英語生物歴史地理etc……。とにかくレパートリー豊富な教科だ。

無論、今日一日で全てをやるわけじゃない。とりあえず、入院中に終わらせる予定である。

途中で小早川さんが点滴袋を交換しに来て、「勉強?」「はい」「偉いねー」なんて会話もしたり。性格はともかく、僕の目に彼女は優しかった。

夜九時を廻った頃、僕は手を止めた。予定していたページまで終えたのだ。

「ふうー」
息を洩らしながらくつと手を伸ばして大きく背伸びをする。

この調子だな入院中にはいけそうだな　なんて思いながら、僕は勉強後恒例の散歩に出かけるためカイロを開けた。夜は昼と違って冷える。だんだんと温まってきた頃、それをポケットに入れて部屋を出た。

最初に視界に移るのは窓の外。
雪は昼間より勢いを増していた。

本来ならば、僕は「これ、つもるかも」なんて楽しそうに呟いたのだろう。

しかし、今日最初に視界に入ったものは違った。

「あー」
蒼く、淡い光に照らされて少女の輪郭がくつきりと浮かび上がる。

線の細い、少し触れたらポロポロと崩れてしまいそうな。

僕は彼女を見て病院をさまよう亡霊を連想した。

それくらい彼女は病的で、儂かった。だからだろう。

僕にとつて、彼女はどんなものよりもキレイに見えたんだ。その姿に、僕は魅入った。永遠とも思えるような時間は、しかし数秒しか実際にはなかった。

彼女も僕に気づいたようで、こちらに振り向いた。太股の辺りまである長い髪が大きく揺れる。

となると、当然目が合うわけだ。

少女の目が僕を再び射抜いた。

その儂さとはアンバランスな強い視線。しかし、それはどこか影を帯びているようにも見えた。

僕は思わず立ちすくんでしまう。

ゴクリと、生唾を飲んだ。

でも、それは緊張したからだだったのか。

それとも、少女の美しさに見惚れたからなのか。

ここで初めて、僕はまともに彼女の顔を見た。

白すぎる肌。それに同調するかの様に白いパジャマ。顔はこの上ないほど整っていて、まともな男なら誰もが美人というのはまず間違いない。

唯一、髪だけが黒かった。シルクのような髪は艶があり、少しのダメージも感じさせない。

女性としての完成形。

「え、と……」

頭を下げて、さっさと通りすぎよう。

そんな考えは一瞬で打ちのめされ、出来なかった。

何か言え。「雪が降ってるね」とか「どうしたの」とか。何でもいい。とにかく、何か言っただ。

「くんばんは」

ぎこちなく笑って、挙句の果てに出た言葉はくだらない挨拶だっ

た。

自分の情けなさに僕はげんなりする。

しかし少女も律儀に、

「こんばんは」

と返してきた。

無表情のまま、平坦と。

だけどそんなことは全然気にならなかった。

だって、透き通るようなキレイな声だったから。

しかしながら、こうなるといよいよ僕は困る。

どうしようか。このまま散歩に行ってしまうおうか　そんな考

えがちらりと浮かんだとき、少女が僕の方に歩み寄ってきた。

なおも無表情で無言のまま、坦々と。

僕は何かわけの分からないプレッシャーを感じ、喋ることもできなければ動くことも出来なかった。

やがて、少女が僕の前に立つ。

彼女は僕の肩辺りまでしか身長がなく、僕が見下ろし、彼女が見上げる形となる。

「な、何かな？」

耐えきれなくなつて、僕は尋ねた。

すると、少女はパジャマのポケットに手を突っ込んだ。何だろうと思っていると、そのポケットから一枚の紙片が出てきた。ポケットに入るよう何重にも折り曲げられていたようで、彼女はそれを黙々と開ていく。

それはきつと新沢が持ってきたであろう、数学のプリントだった。彼女はそれを、果たして無言のまま差し出した。

「落し物。あなたの部屋に入って行った人が落としたから、あなたに渡せばいいと思った」

「あ、ありがとう」

ぎこちない笑みを浮かべて、ぎこちない動きで僕はそれを受け取った。その際、手元を見なかったために少しだけ彼女の手に触れて

しまった。

それはとても冷たかった。まるで、ずっと外にいたみたいだ
ここでふとした疑問が浮かび上がる。

「もしかして、これを返すためにここでずっと立ってたのか？」

コクリ。

少女は頷いた。

オイ、本当ですかそれ。

「い、いつ頃から？」

「夕食を食べ終えた後だから、七時半ぐらいからだと思う」

「……………」

現在、九時ちよつと過ぎ。

単純な計算で一時間半ほどここで立っていたことになる。

「そ、そんなにここで……………えっと、ごめん」

「謝ることはないよ。私が声かけるってことをしなかつただけだから」

特に何も感じないというかのように、彼女は抑揚のない声でそんなことを言った。

でも、絶対にそんなことはないはずである。この寒さのなか、長い間立っていたんだ。体が冷えていることは間違いない。

「いや、俺の友達がマヌケだったからだし……………やっぱり俺が悪いって。手、とても冷たかつたし……………あ、そうだ。よかつたらこれ」

少しでも早く温まれるように、ポケットから僕は先ほど開けたばかりのカイロを取り出して少女に差し出した。

少女はそれは無表情のまま見つめる。数秒の沈黙の後、ゆっくりとした動きで視線を僕の方へと移した。

「いいの？」

「うん。そうだな……………まあ、等価交換ってことで」

「ありがとう」

このプリントは元々僕のものなので、等価交換というのはどうかと思っただが、まあそんなことはどうでもいい。

少女はそれを丁寧に受け取った。

優しく両手で握り、はあと吐息をかける。その仕草から、やはり余程冷えていたことが伺えた。

「僕は彼女のその仕草で、たまらない気持ちになった。今までなかったことがないような、腹の底から湧き上がってくるような気持ちに。頭の中をトンカチで思い切り叩いた様な衝撃に見舞われる。揺れてもいない床が揺れ、くらくらとする。

急に僕は彼女に手を伸ばしなくなった。触れてみたくなった。そんな衝動をぐつとこらえる。

「手、冷えてるよ。部屋に戻ってゆっくり温まった方がいい」「うん。そうする」

そう言って、彼女は部屋に戻っていきこうとする。遠ざかっていく。

「あのさ」
そんな裕香を、僕は呼び止めた。
くるりと振り返り、目で何、と尋ねてくる。

「名前、教えてよ」
病室のネームプレートで、すでに名前は知っている。だけど、僕は彼女から名前を聞きたかった。

少女は一瞬、不思議そうな顔をして答えた。

「白靴裕香。裕香でいいよ」
「しろさや、ゆうか……。じゃあ俺はお前のことを、裕香って呼ぶ。だから、裕香も俺のことを刀根とか想弥って呼んでくれ」

いきなりの宣言と要求に裕香は目を白黒させる。
それからしばらくは少し悩むような様子を見せたが、分かったと頷いた。

「じゃあ、私はあなたを想弥君って呼ぶ」

「ああ。そうしてくれ」

僕は笑った。

裕香は相変わらずの無表情だったが、少しだけ緩んだ顔を見せた。
ような気がした。

そうして僕等は別れた。

ポケットには、あのカイロの暖かさが残留していた。

入院八日目。と言っても、三日間は眠っていたので感覚的にはまだ五日しか経っていないようにしか感じないんだけど。

珍しく髪は寝癖が立ってボサボサだった。

点滴台にぶら下がる点滴袋の中はみっちり液体が詰まっている。交換はすでに終わっているようだ。

それは看護師さんがここに来たことを意味している。

にも関わらず眠っていたのだから、僕にしては珍しく熟睡してしまっただよう。

現在、朝の九時。普段ならとくに起きて勉強を開始している時間である。朝食も冷えきっており、ご飯に限っては湿気も持たれてカチカチになっている。

ボーツとしている僕はそんなことも全く気にならなかった。無意識のまま朝食を食べると、寝すぎて回らない頭に喝を入れるべく、僕は洗顔することにした。

個室にはトイレ、シャワー、冷蔵庫と取り合えず生活出来る環境が整っている。付き添いの家族のためだそう。

蛇口から出る水は冷たかった。手にかかっただけでも意識がはつきりとしてしまっぐらい。それでも構わず僕は洗顔した。

ヒンヤリとした感じが僕の手と顔を包む。その冷たさから、僕は昨日のことを思い出していた。

僅かに触れた手は、とても冷たかった。

もしかしたらこの水よりも。

病的で、儂くて、脆くて、弱々しくて。

唯一、その瞳の輝きだけが強かった。

キュッと蛇口をひねって水を止める。この冷たさだけが手に残る。

品なくズボンで濡れた手を拭くと、ポケットに何か角張ったものが入っていることに気づいた。僕はそれを取り出す。

「あ」

昨日拾ってもらったプリント。

ポケットに入れっぱなしにしてたんだっけ。

まだ内容の確認もしてなかったので僕はそれを開いてみる。

新沢が言っていたよう、数学のプリントだった。……ふむ、まだこのパターンの問題は解いてない。後で解いてみよう。

「ん？」

さっと内容を見てみると、プリントの空白部分には何かが書き込まれた後があった。消しゴムでちゃんと消してあるが、完璧には消えきってない。

僕は最初、新沢が自分が一度使った奴を僕にまわしたと思ってムカついたが、すぐにこれが新沢の字じゃないことに気づいた。

あいつにしては、キレイ過ぎる……。っていうか、どう見たって女子の字だ。

こんな丁寧に数字を書いたりしないだろうし、そもそもこの式は全般的におかしい。

悔しいことにあいつは僕よりも頭がいい。いや、バカだけど、それでもIQは僕よりも高いことは確かだった。

僕でも分かるような問題をあいつが間違えるなんて、それこそありえないわけで、間違いなわけだ。

「と、なるとクラスの女子かだれかがあいつがとっていた俺の分のプリントとすり替えたのか？」

……。

否定できない。

したいけど、僕のクラスメイトならそれぐらいやっても不思議じゃない。

悪い奴らじゃないんだけど、ちょっといろいろと問題があるんだよなー、あいつら。

でも、そもそもだぞ。

根本からミスるようなこと、するか？

「しないよなあ」

成績にこそばらつきはあるものの、基本から全く分かっていないような奴らではない。

「じゃあ、誰なんだよ」

あらゆる可能性は潰えた。

となると、あとは一人だけだ。

「……………」

少し、プリントを眺めてみる。

そうして僕は思い切って行動を起こすことに決めた。男は度胸だ。抽出しを開け、ルーズリーフを数枚と数学の教材を取り出す。そうして筆箱を乱暴に掴むと、僕は部屋を出た。

すぐ横が彼女の病室である。

「……………」

勢いよく出てきたはいいが、ここに来て決心が鈍った。

彼女の個室のドアに手をかけることが出来ないまま突っ立つ。

自分の情けなさに、再びげんなりする。

チキン野郎め。すぐ臆病風に吹かれやがって。男に二言はないはずだろう。立て、立つんだ想！

心の中で咆哮を上げ、僕はドアに手をかけた。……手をかけたんだけど、それをスライドさせることが出来ない。

なんだか、酷く自分が惨めになった。

帰ろう。

度胸もくそつたれもなく、僕は早々に退散することとなった。

肩を落とし、己れの陣地へと引き返す。

と、ここで、

「何してるの？ 想弥君」

という声がかかった。

昨日聞いたあのキレイな声。

漫画の一コマみたいにギク、なんて感じでゆっくりと視線を移すと、その先には裕香がいた。

「あ、いや……ちょっと、ね」

僕はしどろもどろな返事をして一緒に勉強しにきたことをはぐらかした。

大した度胸だよ。そう、僕は自分をたしなめる。

「ちょっと、何？」

抑揚のない声。

その抑揚のなさが僕に隠すことを許さない。

一秒も経たないうちに僕は白旗をあげる。

「裕香さ、このプリントに何か書き込まなかった？」

「……………」

裕香は無言だった。

凶星らしい。

看護師二人といいこの子といい、女の人は隠すことが下手なのだろうか？

「ゴメンナサイ」

「あ、いや違って！ 謝れって言ってるんじゃないんだ！」

唐突に謝れられ、僕は慌てて真意を伝える。

「興味あるのかなーって思ってさ」

僕は開き直りそのプリントをひらひらと見せながら、彼女をじっと見てそう言った。

彼女も同様に僕の目を見つめている。

三点リーダーが飛び交うばかりで、反応がない。ラチがあかないので僕の方から話しかけた。

「もしよかったら、教えよっか？ 一応、数2までなら教えられるけど……………」

言ってる途中で照れくさくなって、僕は彼女から視線を逸らし、空中へと泳がせた。

横目で彼女をしてみる。僕とは違い、彼女は少しも視線を逸らし

ていなかった。

再び沈黙が訪れる。

長いようにも短いようにも思える沈黙を破ったのは、こんどは裕香の方だった。

「教えてくれるの？」

首を少しだけ傾げて、そんな風に言った。

さらさらと髪が揺れる。大げさかもしれないけど、白い頬を流れる黒い髪が僕はオーロラのように綺麗に見えた。

僕はそれに見とれてしまっただけで、それで返事が遅れてしまった。

「お、おお。任せろ、こう見えても成績三十番台をキープしてるんだぜ」

「それじゃあ、お願いします」

丁寧な言葉で、丁寧にお辞儀をして裕香は言う。

僕はその態度にもどかしさを感じ、手を振って止めてくれというジェスチャーをする。

「敬語じゃなくていいって。俺みたいに気楽に話してくれよ」

「じゃあ、お願いする、にする」

「……たははは」

あまり変わっていない様な気がするけど、まあいつか。

僕は無性にうれしくなって、つい顔がほころんだ。

彼女の部屋は殺風景だった。

いや、僕の部屋も大したものなんて置いてないけど、ここにはマンガもぬいぐるみも何もない。女の子らしい物が一つもないのだ。

置いてある物といえば雑誌程度。内容は短距離走などの陸上がメインのようだった。

小谷さんが言っていたことはどうやら確からしい。

「早く」

「　　ととつと。ごめんごめん、ちょっと緊張しててさ。女の子の部屋に入るのなんて初めてだから」

彼女はぼんやりとする僕を急かした。部屋に漂っていた意識が僕の中に戻る。

すでに裕香はベッドに腰を下ろしていて、子供のように足をぶらぶらと揺らしていた。愛くるしいその姿に僕の視線は釘付けになる。「どうかしたの？」

「い、いや。なんでもない」

気づけばまた意識が浮遊していて、僕は苦笑った。

……　　なんか、不純だな、僕。

僕は自分を戒め、邪念を吹き払った。置いてある丸椅子を引き寄せて、出来るだけ彼女の近くに座る。別に下心があるわけではなく、近い方が説明しやすいというだけだ。

昨日拾ってもらったプリントと持ってきたルーズリーフを食事台の上を広げる。

「まず聞くけど、中学三年までの知識はある？」

「うん。一応、卒業証書はもらってるし。でも数1からの知識はないよ」

「そっか……じゃあまず数1の勉強から始めよっか。となると、やっぱり不等式辺りからか」

「不等式？」

「ん？　不等式、聞いたことない？」

コクリ。

黙ったまま頷く。

うーん。そんなもんかな？　僕は中学三年でコラムとして少しやった記憶があるけど……。まあ、学校にもよるのだろう。

「えっと、じゃあこんな記号見たことないかな？」

僕はルーズリーフに不等号を書く。

> . . . <

この四つの記号が書き込まれた。彼女はその記号をまじまじと見

つめ、

「見たことならある」

と呟いた。

とりあえず、この記号を知っているなら大丈夫だろう。いや、何の根拠もないけど。

「不等式っていうのは、何て言うかな……どっちが大きくてどっちが小さいか、それを示す式なんだ。例えば極端な例でさ、 $1 < 2$ 、どっちが大きい？」

「 $2 < 1$ 」

「そう。だから、こんな式になる」

$$1 < 2$$

四つの不等号の下に新たに僕は書き込んだ。

「くつついている方が小さくて開いている方が大きい数字がくるんだ。値や量を出す、といった意味では方程式と同じでさ」

「下にイコールがついている奴とは何が違うの？」

「簡単なんだけど、難しいな……。ええと、下にイコールみたいのがついてるのはその数字も含むってことなんだ。例えば……」

$$x < 2$$

$$x < 2$$

簡単な二つの式を書いてその違いを比べてみる。

「ここからは日本語力になるんだけど、上の方は x は 2 以下。下の方は x は 2 未満ということになる」

「なるほど、分かった。じゃあ、」

彼女が僕のシャーペンを取り、式を書き始める。

$$x > 2$$

$$x > 2$$

さつきとは不等号の向きの違う二つの式を彼女は書いた。

裕香は得意気に語る。

「上は 2 以上ってことで、下は 2 より大きいってこと？」

「裕香、お前センスあるぜ。数学の教授になれるんじゃない

か？」

表現こそオーバーだったが、本当に凄いと僕は思った。僕のヘタクソな説明を一発で理解してしまったんだから。しかも、全く混乱していない。

裕香は照れたのか、無表情のままに顔を赤くするという非常に難易度の高い表情を見せた。

「別に、そんな難しいことじゃないし」

「そっか。そうだな。それじゃあさ、簡単な不等式を解いていこうか。それから難しいものを解いていこう」

僕はニヤリと笑った。絶対値込みの不等号は流石に混乱するに違いない。

そんな少し意地悪な心を持ちつつ、僕等はどんどんルーズリーフに数式を書き込んでいった。

しかし、彼女はどんな問題もすらすらと解いてしまった。恐ろしいほど理解が早く、今から勉強を初めても受験に間に合いそうな気がする。とにかく、それぐらい頭がよかったんだ。

すぐに難しめの不等式や二次方程式などにも取り組み始めて、問題を作る僕の方が時間を費やしてしまった。

相変わらず無表情だったけど、心なしか裕香は楽しそうに見えた。生き生きとしているように感じる。もともと数学が好きだったのかもしれない。

シャーペンを置いたのはかれこれ四時間ほど経った後で、結構持ってきたつもりだったルーズリーフはあつという間に書くスペースがなくなってしまった。

「いや、マジで裕香、センスあるぜ。一日で一章終わらせるなんてなかなか出来ないって」

「でも、これただの計算だし……」

「絶対値込みの式はかなり難しめの部類だよ。場合分けとか一瞬で理解したし、天才としか思えないって」

「そう、かな」

「裕香は、照れくさそうに笑った。」

あの無表情が崩して、彼女が綻んだ。

花のようなその柔らかな笑みに、見とれた。自然と穏やかな気持ちになり、僕はほとんど無意識のうちに喋っていた。

「裕香。お前、笑っていた方が可愛いよ」

「え？」

……………。

暫くの沈黙の後、初めて気がついた。

自分が何を言っているか。

思わず顔が火照る。自分で顔が赤くなったことにすぐ気づいた。

慌てて弁解しようとする。だけど、いい言葉はなかなか思いつかない。

「あ、いや！ 別に深い意味はないぞ！ あの、裕香ってあまり笑ってないからさ、笑っていた方がいいよなって」

彼女は僕から顔を逸らして俯いている。長い髪で顔が隠れ、表情は分からない。

「ほら、その、俺たちぐらいの子供って普通笑ってるものだから……」

最早僕の言っていることは弁解でもなんでもなかった。

何を言っているんだ、僕は。

何て言えばいいのか、言葉が思い浮かばない。

「あの、ごめん」

最終的に、謝罪の言葉に落ち着いた。

ほんっと、情けない。

「……………」

裕香はというと、依然変わらず俯いている。僕が言ったことが届いているのかさえ分からない。

何となく、気まずかった。

せつかくいい雰囲気だったのに。僕は落ち込む。

肩をガツクリと落としていると、髪の中から声がした。

「……………みる」

「え？」

虫の羽ばたきのような小さな呟き。ただでさえ裕香の声は小さい。それをさらに小さくされてしまったら僕は聞き取れない。

だからと、裕香はさつきより少し大きな声を出した。

「笑うよう、努力してみる」

意外な言葉に僕は顔を上げる。相変わらず裕香の方は俯いていたけど。もしかしたら照れているのかもしれない。いや、きつとそうなんだろう。

笑うよう、努力してみる。

それはいいことだ。ああ、きつといいことさ。

「そりゃ、よかった。周りの人もきつと喜ぶ」

「喜ぶ？　なんで？」

「決まってるだろ。裕香は家族の笑っている顔と無表情な顔、どっちを見ていた方が楽しい？」

「……………」

「そういうこつた。人間で一番いい表情は笑つてるときだけ？　だから苦しいとき笑つたりするんだろ、きつと。だから、もつと笑つた方がいい。周りの人は言うに及ばず、自分のためにもなるからさ」
これは全くの本心だった。

裕香は俯いていた顔を上げ、ジツと僕の方を見ている。

何だか急に恥ずかしくなって、僕は立ち上がった。

「とにかく！　とにかく、笑え。看護師さんとかも笑顔がないって心配してるぞ。」

……………俺の言いたいことはそれだけだ。もうルーズリーフに空きがないし、俺、戻るよ」

まとめるようにして僕は言い、立ち上がった。顔が真っ赤になっていると分かっているので裕香の方は見ない。すぐに彼女に背を向けて、自分の部屋へと向かう。

その際、ちよつと待つてと声がかかった。意外だつたために思わず僕は振り返つてしまった。今更また背を向けるのも不自然なので、そのまま続きを待つ。

一瞬言葉につまつた様だが、意を決したのか、裕香はようやくその小さな唇を動かした。

「明日も、教えてほしいな」

僕からちよつとだけ顔を逸らして言う裕香はとても可愛かった。

僕は自信ありげにどんと胸を叩く。

「ん。分かった。じゃあ明日は二次関数だ。取り合えず、今日はお開きつつうことでもいいよな？」

「うん。今日はありがと」

「いえいえ、どういたしまして」

僕は笑った。すると、裕香の方もぎこちなくだけど笑った。

それにちよつと驚いて、だけどすぐに喜びに変わった。

ドア越しに台車が転がる音がする。どうやら天敵の食事が運ばれてきたらしい。

それじゃあと、僕等は今日の授業を終了した。

午後六時。いつもなら来てくれる友人は今日模試のために来ていない。代わりと言っちゃなんだが、別の人物が来ていた。

衣川良一きぬかわりよいち。そいつも一応僕と友達という関係にあるのだが、こっちの方は親友なんかでは全然なく、むしろ悪友と言っべきだろう。名前に反して僕と一緒に昔、散々悪をやらかしていた正真正銘の悪友だ。

「よお刀根。なかなか無様じゃないか」

そんな暴言を吐いてニヤリと笑う。

僕は睨みつける様にして言った。

「うるせえバカ衣川。帰れよ」

「その言い方はなんだ。心配してやってきてやったつてのによ」

そう言う衣川の顔はそんなことを微塵も感じさせない汚れきった笑みを浮かべている。

「お前の魂胆は分かってたよ。見舞い品の食いもんならお前なんぞにやらん」

「ツチ」

「否定しろよ！ 冗談で言ったつもりだったんだぞ」

「俺様はこう見えても素直なんだよ」

「お前の場合は自分にだろ」

その通りだな、と衣川はうははと笑った。つられて僕も笑う。

うははははは。

かははははは。

不気味な笑い声が重なり合い、部屋には何だか気持ち悪い黒いオラが漂っていた。

端から見ていたらきつと気持ち悪かったに違いない。

「ははは……で、どうよ勉強は」

「俺様にそれを聞くか？ お前は鬼か？ 悪魔か？ 鬼畜か？」

最後の一言に僕はチョップを繰り出した。機敏な動きで衣川はそれを避ける。

「元氣そうじゃねえか。入院しててその技のキレだ。まだまだお前も現役だな」

「何だよ、それ。わけ分かんね」

「ここはノツとけよ。だろ、とか言つて」

「ガキかお前」

「ああガキだ」

「こんなガキは嫌だ」

「うるせえクソガキ」

「クソガキはお前だ」

「このっ……っく、まあいい」

その通りだと思ったのだろう。衣川は言葉を飲みこんだ。それとも、僕に対する罵倒の言葉が思いつかなかったか。

いずれにせよ、僕は気分がいい。

「反論出来ねえか、衣川。そうだよあ、三流私大でD判定じゃなあ」

「っく、っく……この、お前つて奴は……この……」

「何か言ってみるよ。ほら、早く。何か言えつて」

「……モテない冴えない嫌われ者」

「っくっ」

調子にのつてたら思わぬカウンター。

ニヤリと笑う。しまった、たじろいてしまった。この隙を逃さず、衣川は復讐を開始する。

「雪田静江と付き合えたつてのにデートもロクにしないで、拳句の果てにフラれてやんの。っは、バーカ」

「お前の方がバカだろ、バーカ」

「知能のことを言つてんじゃねえよ。判断力がお前はバカなんだよ。バカで、おまけにマヌケか。救いがねえなお前」

「うるせえクソ衣川」

「っは。自分が口で負け始めたらそうやってうるせえとかしか言えなくなる。負け組だよお前」

「失せる消える地獄に落ちろ二度と来るな帰れ」

「負け組負け組」

「お前は人生の負け組だろ」

周りに人がいたら眉をひそめるに違いないような罵り合いを僕等はしばらく続けていると、急に衣川がため息をついて塩らしくなつた。

あからさまな変化に僕は思わず戸惑う。

「何だよ、らしくもないな。俺の文句でお前が凹むなんてありえないだろ」

「普段ならそうなんだけどよ、今はマジで凹んでんだよ」

「……………」

「俺、浪人しちまうかも」

天井を見て衣川はため息を漏らすように呟いた。こいつでも将来のことを気にしてるのかと思いつつ、僕は仕様がないと頷く。

「自業自得だな。散々遊んどいて今更仕方ないだろ」

「だよなあ。模試でE判定をついにとつちまったよ。今まではギリギリDもらえてたけどさ、EだぜE。ヤベェよ」

それでグチりに来たわけか。

僕は同情するよりも先に呆れてしまった。

一応、僕は病人だぜ？ 分かってんの、お前。

出そうになつた言葉をなんとか飲み込み、わざわざ僕のところまでグチりに来た衣川を改めて見た。

ああ。でも、お前確かにバカそうな顔してるよ。よかつたじゃないか、外見と中身が一致していて。

もちろん、こんなことを口には出さない。友情は大切だよな。

「ま、今からでも遅くないし、頑張ってみれば？ 地元、嫌いなんだろ」

「そうなんだよ。後一年ここで親と一緒に暮すなんて最悪だ……」
ピクリと、僕は反応した。一瞬で空気が凍り、時の流れが止まる。
衣川も自分のミスに気づいたようで、しまったという表情になる。
「わ、悪い。ちと口が滑っちまった」
「いや、いい。実際そんなものなんだろうしな」
こいつも一応一般常識は備わっているようで僕は安心した。
相変わらず気まずそうな顔をしている衣川に、僕は出来るだけ楽しげに話す。

「気にすんなって。お前の本音だろ」

「まあ、そうなんだけど……ごめん」

「らしくないぜ、衣川。笑い飛ばしちまえよ」

僕はCMに出てくるお兄さんのようにニカッと笑った。いや、あくまで主観的に見てだが。

衣川も笑ったが、それは無理作りと一瞬で分かってしまうような笑みだった。ああ……多分前に僕が浮かべた笑みってこんな感じだったんだろうな。

何となく気まずい空気が僕らを包む。

「マズい。何か話題を……」

「ところで衣川。前々から作るって言うってた彼女はどっになった？」

「っう……」

「まだか。そうかそうか。まあ、そんなもんだろうな」

「どういう意味だよお前」

「その通りの意味として受け取ってくれて構わないぜ」

「やっぱりウザいな、お前」

一気にさっき浮かべていたムカついている表情に戻る。その表情を見て、僕は安堵した。

「ああ。これでいいんだ。これでな」

僕等は再び罵り合いを数分続けて、それから衣川は帰っていった。再び、病室は静かになる。

「はあ」

再び、僕は幸せを吐き出した。

やってしまったものはもう取り返しがついたりしない。

「はあ」

そう分かっているのに、僕はあと数回、ため息を漏らした。

外では、夜の闇に染められた灰のような雪がしんしんと降り積もっている。

衣川が帰ってから気づけばもう三時間も経っていて、点滴袋の交換もほんの数分前に行ったような錯覚に陥る。

会話をしてから、時間の流れが急に早くなった。いや、僕の時間がきつと遅くなったんだろう。そう、止まってしまったんだ。

シャーペンを握った手は一向に動く気配を見せない。

世界が規則正しく進んでいく中、僕の時間だけが止まっていた。

カチ、カチ、カチ、カチ……。

リズムを刻む時計の針が進む音がやけにうるさい。

何だかわけの分らない苛立ちを覚え、僕は病室から飛び出した。看護師さんに気づかれぬように静かに、尚且つ素早く廊下を歩き、転がる点滴台の音も最小限に抑える。

しかし途中でそんな苦労も空しく、小早川さんと出会ってしまった。

「何してるの!？」

怒ったような驚いたような、そんな声を上げるけど、僕はそれを無視した。

呆気にとられたのか、小早川さんは注意したり引き止めたりすることもなく、ただ呆然と僕を見ていた。

僕はその視線も気にせずにエレベーターのボタンを押した。たまたまこのフロアにとどまっていたらしく、扉はすぐに開いた。乗り込むと『閉』のスイッチを押し、最上階に一番近い八階のスイッチ

を押した。

ウイイイイン。

鈍い起動音。だるくなる体。

やがて、体がふわりと軽くなる。同時に、重苦しい扉が開いた。

ナースステーションには看護師さんがいた。不審げに僕を見ていたが、特に声をかけてくることもなくすぐ視線を逸らして自分の仕事に戻った。

案外適当だな、なんて思いつつ僕は階段の扉に今度は手をかける。目指すは屋上。降り積もる白い雪。

点滴台を持ち上げて僕は階段を登る。危うくコケそうになったけどギリギリのところで大丈夫だった。

扉の先には白く塗られた屋上がある。僕は勢いよく開けようとしたけど、何かにつつかえているようで簡単には開かなかった。雪があることに気づかず、僕はただ悪態をつく。

全身を使って僕はドアを開ける。辛さを訴えるような悲鳴を上げながらドアは開いていった。すきま風が当たり、うなじがしんと冷える。

ようやく完全に開ききり、僕は一步を踏み出した。そのまま手すりのあるところまで行こうとしたが、想定外のこと足が止まる。

「あ……」

先客がいた。てっきりこんな雪の降るような真冬に屋上へ行くのは僕ぐらいだろうと思っていたのでビックリする。

僕のもらした声に気づいたらしく、その先客が振り向いた。

優しそうな中年の男性と目が合う。年は四十代後半ないし五十代前半だろう。失礼だけど、もうおじさんと呼ばれてもおかしくなさそうな外見をしている。

「お、珍しいな。こんな寒い日にここにくるなんて。しかも患者か。ダメじゃないか、もう君は寝ないよ」

開口一番、注意がきた。「はあ」なんて相槌を打っておく。

相槌を打ちましたものの、僕はその注意を無視してドアを閉めた。

戻る気はないという意思表示のつもりだが、相変わらずニコニコと笑うおじさんにその意図が伝わったかは分からない。

僕は愛想笑いを浮かべてなんとなく距離をとって手すりにもたれた。もちろん、点滴棒を転がすことは出来ないので持ち上げて運んだ。

病院のスリッパを履いているため雪が中に入ってくる。冷たさが一気に脳天までこみ上げてきて、サーッと鳥肌が立った。

「うわっ、さみ」

「まあそんな格好をしていたら無理もないだろうな」

そのおじさんは非常にフレンドリーだった。笑いかけて僕に躊躇なく話しかけてくる。

僕も何となく笑って答えておく。

「ははは……そうっすね」

「ところで、君は何をしに来たんだい？」

「別に、とりわけ意味はないんですけど、ただちょっと鬱屈な気持ちだったんで外で雪でも見ようと」

「そうか」

「あなたは何をしてるんですか？」

「いや、僕も何かしているわけじゃなくてね。ちょっと感慨にふけていたんだ」

「そうですか」

「まあ、気持ちの整理っていう点では同じだね」

気持ちの整理。それは、何かがあつて気持ちが乱れてしまったからすることだ。

つまり、このおじさんも“何か”があつたわけだ。

その“何か”が気になつたけど、あえて僕は聞かなかつた。なんとなく、聞かない方がいいように思えたのだ。

「ここはいいところだね」

しみじみとした口調で、吐息をもらすように呟く。

僕は思っても見なかつた言葉にきよとんとしながらかも、それに頷

いて肯定の意を示す。

「そうっすね。東京にくらべたら田舎ですけど、暮らしに不自由はないし東京にも一時間ちよいで行けるし、いいところだと思います」
「ほお。珍しいね。君ぐらいの年の子が地元に愛着を持つなんて」
「そうですかね？ 案外少なくないかもしれませんよ」

「どうだろう。僕は今でこそ故郷が好きだけど、昔は早くこんなところ出てってやるってよく言ってたな」

「まあ、それが普通なんでしょうね。僕がイレギュラーなんですよ、きつと」

「はははは」

おじさんは笑った。僕もたははと乾いた笑いを漏らした。

「否定はしないんですね」

「あ、いや、悪かったね。不快になったのなら謝るよ。すまなかった」

「あ、いえ、そういう意味じゃなくて……」

僕は肩をすぼめた。別に嫌味で言ったわけではなかったのだ。それを見ておじさんが小さく笑った。

ここで沈黙が訪れる。おじさんは僕から目を逸らし、点々と光る街へとその視線を移した。

僕も同じように視線を移す。

しばらくの間そうしていると、知らず知らずの間にあの鬱屈とした気持ちはなくなっていた。

すつきりした気分、というわけでもないが、少なくとも心は軽くなっていた。

「それじゃあ、僕はもう」

「そうかい。早く寝るんだよ。夜更かしは患者の敵だからね」
「分かりました」

そう僕が言うと、おじさんは軽快に笑った。

よく分からなかったけど、僕も笑っておいた。

やっぱり、笑顔は人を幸せにするに違いない。僕は改めてそう思

い、僕は来た道を戻っていった。

Chapter 1 日々の変化 / 5 (後書き)

どうも、グレイシヤです。

現在、OSをWindows7の版に入れ替えまして、PCの調子があまりよくなり、メインサーバーの方から原文を持ってこれない状況になっています。

その上、最近少々忙しくなっており、後一週間ほど更新が出来そうにありません。
読んでくださってくれている方には非常に申し訳ないです。

先ほども述べたように、後一週間程で落ち着くと思しますので、その時に数話まとめて投稿したいと思います。
それでは。

2009/2/24

Chapter 1 日々の変化 / 6 (前書き)

ご愛読して下さっている方々、長らくお待たせしました。更新再開です。

えー、一週間といいながら大幅に遅れてしまい申し訳ございません
(汗)

とりあえず言い訳をさせていただくと、時期的に勉強が大変だったというのと、リナックスからウィンドウズ7、さらにウィンドウズXPにOSを替えて、文章を保存していたファイルタイプが異なってしまう、文字化けが発生。その処理が大変だった、という理由であります。

これから遅れた分、少し更新ペースをあげたいと思いますので、今後も何卒よろしくお願いいたします。

盛大に風邪を引いた。体温計は四十・一度という高記録を打ち出し、心なしか小早川さんも怒っている様に見える。いや、実際怒っているんだけど。

蛇に睨まれた蛙、か。なるほど、実能的を射た言葉だ。

「……………」

あのフレンドリーで口数の多い小早川さんが全く喋らずに黙々と仕事をこなしていく。

空になった点滴袋を変え、血圧を計り、僕の今日のコンディションを記録用紙に記入していく。

「……………」

意を決して僕は話しかけてみた。記録用紙から僕へと目が向けられる。

視線は鋭く、首筋に日本刀でも突き付けられてるような感じさえるほどだった。

僕は額に冷や汗が出てくるのを感じつつ、それでもにこやかに笑っておきながら続ける。

「今日、食事って食べられるんですよね？」

「検査結果次第です」

何故か敬語だった。

その異様な言葉遣いに僕は自然と恐怖する。

僕は手遅れだと思いつつ、一応謝っておくことに決めた。

「あの……………」

「何ですか？ 私は今仕事をしているんです。出来るだけ手っ取り早く話してください」

すまし顔ってところがまた恐ろしい……………。

僕はこの恐怖のせいなのか、風邪のせいなのか分からない身震いをなんとか堪えるので精一杯で、結局何も言えなかった。

記入を終えたらしく、小早川さんは何も言わずに部屋を出て行く。それも早足で。

ピシヤリとドアが閉められた。反動でまた少し開き、そうして再びゆっくりと閉まっていく。

ああ、僕はどうやら嫌われた様だ。

「……………こええ」

僕は風邪が原因とは到底思えないような鳥肌が立った。

これは尚更早く退院しないとまずそうだ……………。

検査を終えた僕は再び自分の病室に戻っていた。

結果、食事はNG。はは、ホント最高。

顔を上げてボーッと天井を眺める。熱くて寒い、温泉と冷水を行ったり来たりしているような感覚。

キリキリと締め上げられるような頭の痛みに度々顔をしかめた。

咳は出来るだけ堪える。胃液がリバーズしてきそうなのもそうだが、本当の理由は別にある。

再び視線を食事台の上に戻し、コキコキと指を鳴らした。

「……………こんなものでいいかな」

からからから。乾いた音を立ててシャーペンが食事台の上を転がる。

シャーペンのすぐ側のルーズリーフには二次関数に関しての知識やらが載っていた。自分にしては割とキレイな字で。

きつと裕香ならこの説明でも理解できるだろう。

後は参考書を適当に渡して問題を解いてもらえばいいか。

だけど、僕は正直限界が来たみたいだった。休養を訴える脳を酷使して書いた反動が来たのだろう。まるで頭の中がハンマーで何度

も何度も殴りつけられているようだ。

もう、無理。

僕はベッドに倒れこむようにして横になった。活動限界時間だ……。いや、臨界点を突破しているな、これ。

いや待て……僕にはまだやることがあるだろう！ 後少しだけ持ちこたえろ、僕の体つ。

「うおおおおお」

呻き声のような雄叫びを上げて僕は再び体を起こした。テレビ下の抽出しに手をかけて中をあさぐる。

目的のものはすぐに見つかった。それをわしづかみにすると台の上の放り出す。パサリと実に紙らしい音を立てるのは、高校一年の頃使っていた学校の数1の参考書。

それを台の上に置くと僕は最後の気力を振り絞り、参考書の問題にチエツクをつけていく。パラパラと素早くめくっていき、重要なところに蛍光ペンでアンダーラインを引いていく。最後に、小早川さん宛てにメモを残した。

『白鞘裕香さんにこれを渡してください』

乱暴に書かれた字はしかし、しっかりとメモ用紙の一枚に大きく書かれてあった。

参考書に僕の書いた説明を挟んでそのメモを上置く。

「……ふううう」

やるべきことを終え、やりきったという達成感と満足感が生まれる。

問題は怒っている小早川さんが渡してくれるかということだけ、今の僕はそこまで考えが回らなかった。

もういいだろう。僕はよくやった。

意識を遠ざけ、休息を取るべく眠りに入ろうとしたが。

「生きてるか、想弥？」

ドアのスライドする音とともに、凜とした声が室内に響く。

今度は眠気の方が遠ざかっていく。僕は心中でがくりと首を前に垂らした。

「ああ、生きてるよ、姉ちゃん」

「それは良かった。最愛の弟に死なれたら困るからね」
うんうんと頷く姉ちゃん。

あなたのおかげで眠気が吹っ飛びましたよ。死なれたら困るんでしょう？ 寝させてくださいよ。

「つい最近見舞いには来ただろ？ どういう風の吹き回しだよ？」
そう思いつつも、口はそうは言えないのであった。

「ん？ いや、たまには弟にも会いにいつてやらないと、姉さん失格でしょ？ それに、久しぶりに友達にも会いたかったし」

「友達？ ふーん。俺と同様入院でもしてるの？」

「いや、逆。患者を見る方」

「じゃあ、医者？」

「医者のおサポーター」

「……………」

つまり、看護師。

えーと、姉ちゃんは今二十五歳。同い年、もしくは近い年の看護師さんと言えば……………。

僕はサーッと血の気が引いた。顔は赤いままだったが。

「あんた、明菜の言うこと無視してさむーい屋上に行った拳句、四十度の高熱出したんだって？」
にっこり。

姉ちゃんは天使のように笑った。いや、僕には悪魔に見えるんだけど。なるほど、小早川さんと友達というのも頷ける。

僕は玉のような汗を額に浮かべる。到底風邪のせいとは思えない悪寒が背筋を走り、ガタガタと体が震える。

「いや、あの……………」

「問答無用」

脳天に衝撃。

見事姉ちゃんの手刀が決まったのだった。

内部もガンガンとするのに、外部からも衝撃を受けて僕の頭はどうにかなくなってしまいそうだった。

「あんだ、看護師の言うことを何無視してんの？ 何様のつもり？」

「す、すいません」

「謝って住む問題じゃないでしょ？ あんだ、もしも入院延長とかになったら張り手喰らわすからね」

「……………」

「返事」

「……………はい」

とねえりが
刀根恵理香。

警察庁課長補佐を務めている二十五歳現役バリバリの婦警。

そうして、恐ろしいことにこれが僕の姉ちゃんなのであった。

というわけで、姉ちゃんは東京に住んでいて、僕とは現在別居中である。

並みほどの頭しかない僕とは違い、異例の早さで警察庁課長補佐の地位まで上り詰めた超のつくエリートである。

性格は厳格で悪を許さない。高校の頃、付き合っていた彼氏を一分の遅刻でふったことがある、と言えばその凄まじい厳格さが分かるだろう。

容姿はどっかのモデルさんみたいで、故にふってもふっても彼氏がすぐにつく。厳格というだけで特に性格が悪いわけでもなく、例え何時間遅れようが遅刻にも理由があればすぐに許すという寛容さも備わっている。

ただ、ふられなかった最高の記録は僕の知る中では今付き合っているらしい遠藤さんって人で三ヶ月。

……………はて、この人はどれくらい持つのだろうか。

「ん？ 何これ？」

僕が後どれくらいでふられるか予想していたら、姉ちゃんが机の上のものに目を止めたらしく尋ねてきた。

しまった、と思ってももう遅い。

熱に犯され、あまり深く考えることが出来なかつた。だから僕は見られてしまったものは仕様がなないとすぐに開き直り、正直に話した。出来るだけ坦々と、普通に。

「ああ。今隣の女の子に勉強教えてあげてるんだよ。丁度よかつた。姉ちゃんそれ渡してきてくれない？」

「それがものを頼む態度なのか。そうか、あたしはあんたのしつかけを間違えたようだね」

他の部分でミスった。

「すみません、口が滑りました。お願いします」

「よろしい。目上の人に頼むときは例え身内や親しい人でも敬語を使うこと。原則はしつかり守りなさいよ」

「はいはい」

「そうかそうか。想弥はあたしを怒らせたいのか」

「すみません。はいでした。以後気をつけます」

「よし、いい子だ。それで、何て言えばいいの？ バカな弟が真冬の夜屋上に出て行って四十度の風邪ひいて来れないからこれを渡して欲しいって頼まれたって言えばいいの？」

「……すみません。あの、早すぎて聞き取れなかつたんですが」
恐るべしエリート婦警。

噛まずにこれだけの速度で喋れるとは……。

「だから、バカな弟が真冬の……」

「もう結構です。何でもいいので渡してきてください」

とにかく休息をとりたかつた僕は、そう適当に姉ちゃんをあしらつてからまぶたを閉じた。

分かつた、という返事の後、カツンカツンと軽快な足取りが耳に入ってくる。やがて、その足音はドアの向こうへと消えた。

……頼まれたら初対面の人でも堂々と会いにいくつて凄いな！。全く人見知りしないんだもんな。

会う度に注意してくるのは姉ちゃんなりの心配とはちゃんと分か

っている。だから僕はそれを不服としない。暴力はどうかとは思
うが。

三日前来てくれたばかりだというのに今日会いに来てくれたのも、
きつと小早川さんから連絡を受けて心配してくれたのだろう。

将来、姉ちゃんには姉孝行せねばなるまい。

静まり返った病室の中、僕は密かに決意したのだった。

/ 7

コンコン。

僕はそんなノックの音で目を覚ました。

すでに辺りは暗い。時計に目をやると、時刻は午後七時だった。

こんなに経ってたのか……。姉ちゃんはまだ帰ってるな。となると、一体誰だろう？

呆然していると返事を催促するよう、再びノックがあった。僕は慌てて返事をする。

「どうぞ」

むくりと体を起こしつつ返事をする。寝て熱が下がったらしく、体を起こしてもそんなに辛くなかった。

スーツとドアが開く。顔を覗かせたのは意外な人物だった。

「こんばんは、想弥君」

「こ、こんばんはって……どうしたんだよ、裕香」

「風邪ひいたって聞いたから。あなたのお姉さんに」

「そ、そうか」

「うん」

一旦会話が途切れ、沈黙が訪れた。黙って裕香は僕の方を見ている。

じいつと僕を見つめてくる瞳には濁りつつもものがない。僕は照れくさくなって顔を逸らした。でも、ちろちろと横目で彼女を確認する。

淡い光が彼女を照らす。光に照らされた彼女は、宝石よりもまぶしくキレイに感じられた。

やがて、裕香の方から静寂を破った。僕は目を逸らしつつ返答する。

「大丈夫？」

「ああ。大したことないよ」

「お姉さん四十度って言ってたけど」

「あははは。確かに四十度あったけど、寝て大分よくなったみたいだ」

「そう。よかった」

「立ちっぱなし、辛いだろ？ 座りなよ」

僕は食事台の横に置かれている丸椅子を指さした。彼女はそうする、と頷く。

座るまでの一連の動作はとても優雅で可憐だった。僕はそんな彼女に釘付けになる。

病的で、儂くて、脆くて、弱々しくて。

危うい感じが絶えない彼女。

僕は何故か、そんな彼女を放っておけなくなった。だけど、その理由がよく分からない。

「問題は解けた？ っていうか、俺の説明文で理解できた？」

「うん。大体出来たよ。想弥君って説明上手だね。理解も完璧にしてるみたいだし」

「まあ、一応来年から受験生だしね」

「そうなの？ じゃあ、一つ私より年上なんだ」

「そうなるのかな。あ、だけど別に敬語とか堅苦しくしなくていいからさ。呼び方も今のままでいいし」

「分かった。じゃあ、このままで呼ぶことにする」

コクンと機械的に頷く裕香に、僕は苦笑する。

「素直なんだな、裕香は」

「そうなのかな？ よく分かんない」

そう言って首を傾げる裕香はお人形さんみたいでとても可愛らしかった。僕は苦笑を微笑に変える。

と、ここで裕香が食事台の上に僕が貸した参考書等を置いた。綺麗な字が並ぶブルーズリーフを見て、僕は少し感心する。

「凄いな。ほとんど解けたんだ」

「八割方ぐらい。二割は出来なかった」

「上出来上出来。全然飲み込み早い方だよ。問題は責任もって俺が解答しておく。……で、どうしようか？俺の方は大丈夫だけど、明日は休憩する？結構疲れるだろ、数学」

「ううん、全然。楽しいよ」

「そ、そうなのか……。ホント凄いな、裕香は。中学校の頃も頭はよかったんじゃないか？」

「……………」

僕が尋ねると、裕香は黙り込んでしまった。

一瞬、何故か分からなかったけどすぐにハツとなる。

彼女はこう言っていた。『「一応」卒業証書はもらっている』と。もしかしたら、中学校の頃からあまり学校に行っていないかった……。いや、行けなかったんじゃないだろうか。

「中学校の頃は、あまり学校に行っていない。病院で過ごす方が多かった」

「……………」

案の定の答えが返ってきた。穏やかだった彼女の顔が再び無表情になる。

僕は自分の考えなしの発言、そして無神経さが嫌になった。所詮は二流大学しか合格出来ない頭。いい言葉も思い浮かばず、僕はありきたりな謝罪の言葉しか口に出来ない。

「ごめん」

「別にいいの。たまに小学生の時の友達とかが合いに来てくれたし。それに、中学校はとても面倒くさいんでしょ？定期テストとかあって」

そういう裕香の目にあの強さはなかった。寂しそうで、何も見えないように思えた。

ただ、空を見つめている。瞳に映るものは焦点が合ってなくて、何もはつきりと映っていない。全てが霞んで見える。

「こつこつという目を、僕は嫌というほど知っていた。帯びていた影が、くつきりと姿を現した瞬間。僕は考えるより早く口を動かしていた。」

「じゃあさ、授業しよう」

「え？」

「面倒くさいぜ？ そりゃあもう物凄くな。数学から社会まで全科を教えてやる。月曜から金曜まで毎日四時限ずつ。時間割はこつちで考えとく。俺が先生で裕香は生徒だ。一回はあの苦しみは味わうべきだ。もう嫌って言うほど教えてやるから覚悟しておけよ」

裕香はきよとんとした目で僕を見ていた。

僕も裕香を見つめる。凝視する。

「じゃあ、お願いします。先生」

やがて、やんわりと。

彼女は柔らかな笑みを浮かべた。

僕はよく知っている。

必要なんだ。周囲の手助けが。

放っておけない理由がようやく分かった。気丈に振る舞うその姿が、昔の僕と重なるんだ。

生きながら死んでいる。そんな感じ。

その日から、僕の中で何かが変わった。

日々が変化しつつある。

Chapter 2 そこにある意味 / 1

Chapter 2 そこにある意味

/ 1

「分詞つてのは動名詞とか不定詞と似たようなもんで先行詞を修飾するもんだ。だけどこいつは仕組みがちよつと厄介で」

「大丈夫。教材の説明読んで大体理解してある。それに分詞自体は中三で知っているし。分からないところは自分で質問するから」

「そ、そうですね……すみません」

「何で謝るのよ、想弥君」

家庭教的なことを始めて四日目。

僕はようやく飲食に許可があり、毎日食事を楽しむようになり、裕香は僕の授業をそれなりに楽しんでくれている。いや、根拠はないんだけど……多分楽しんでるだろう。

今ある教材、つまり僕が受験対策のために持ってきた教材を使って裕香の授業をしているんだけど、裕香は全く苦にせずやっている。

まず、脳の容量が半端ない。一度見た単語は必ず一発で覚え、一度覚えた文法は二度と忘れない。

内容はほとんど変わらないからと英2から始めたのはどうやら正解のようだった。

その他の教科もあまり変わらない。大学受験に向けた教材がほとんどだというのに、裕香はそれをすぐにこなす。もしかしたら僕よりも出来ているものがあるかもしれない。

生まれながらの天才ってというのはやっぱりいるもんだ。実際、家族にいたからよく分かる。

「ここはどういう意味？ 想弥君」

「ん？ ああ、これか。これはね」

授業はこんな感じで進んで行く。大抵裕香は自分で読んで理解してしまっているので、僕の出番はいつもごく僅かなものだ。こうやって分からない部分をちよこつと教えるだけである。

それでも裕香に勉強を教えるのは楽しい。

まあ、これでも一応受験が迫っている身なので自分の勉強も同時進行である。裕香が僕の教材を解いている間、僕はセンターの過去問等を解いていた。

それも裕香がとても優秀なおかげで、教えることがあまりないからだ。

シャーペンが紙の上を滑る音と時計の進む音の奇妙なハーモニーが僕等を包む。

僕が姉ちゃんが持つてきてくれたミネラルウォーターで喉を潤している時、そんな沈黙を裕香は何の前触れもなく破った。

「私はあなたを愛するために生まれてきた」

「！？ んっげほっげほ！ い、いきなりどうしたんだよ裕香」

「そんなにビックリすること？ ただ長文解釈のところの一節を和訳しただけなのに」

そういつて裕香は長文の一文を指さす。

そこには確かに『I was born to love you』と書かれていた。

僕は何故か赤面しながら裕香に言う。

「この二人っきりの状況で言う文じゃないってそれ！ マズい誤解を生むことになるぞ、下手すりゃ……」

「あははは。そうだね」

「お前はそんなのゴメンだろ？」

「さあ。どうだろう」

ニヤニヤと笑う裕香。僕はあんまり過ぎるジョークに項垂れる。

最近、裕香はよく笑うようになった。今日も再び浮かべたその笑みに、僕は項垂れつつも幸せな気持ちになる。

出会ってから一週間程しか経っていないけど、彼女の表情も豊かになりつつあった。思うに、元々は明るい性格だったのかもしれない。

「そういうジョークはおもしろくないぞ。っていうか傷つくから。さ、早く勉強に戻りな」

「はい先生」

わざとらしく子供っぽい声で返事をする。彼女は再び問題を解き始める。

僕も問題の方へと顔を戻した。

「でもさ、一度でもいいから好きな人にそんなこと、言われてみないな」

「」

僕は戻した顔を再び上げて彼女を見た。

彼女の視線は窓のその先へと注がれている。どこか、遠くを見ている。

心なしか、少し頬が赤い。

……ここに来る前、やっぱり好きな人とかがいたんだろうか。そうだとすると、やはり気の毒だ。

僕は精々、彼女を少しだけ元気づけるぐらいのことしか出来ない。ぐるぐると回る思考の螺旋。軒並みな僕の知能では、気の利いたことなんて思いつかない。だから、ありふれた言葉しかかけることが出来ない。

「早くそんなことが起きればいいな」

「」

失言したことに対して照れているのだろうか。裕香はさらに顔を赤らめてうん、と頷いた。

完璧な人間なんてどこにもいない。事実、こうして彼女もちよっとした綻びを見せている。

その綻びを僕は可愛らしく思い、そうして再び僕らは問題と向き合った。

が、数秒も経たないうちにちらりと裕香の方を覗く。
どつやら同時に裕香の方も僕を覗いたらしく、裕香と視線が重なった。

部屋に、クスクスという笑い声がこだました。

/ 2

「オイ。お前の隣の病室の子、めっちゃ可愛いじゃんか」

六時になると新沢がやってきた。部屋に入ってきて開口一番、僕の体調のことを尋ねるでもなく、ただ裕香が可愛いという事実を述べながら。

見舞い品は新沢が読み終えたジャンプと授業プリント、そして板書を写したルーズリーフ。

そんなものには目もくれず、僕はただ新沢の顔を目を丸くして見つめた。

マテ。落ち着け。裕香のことを可愛いと思わない男がいるはずがないじゃないか。

「だったら何なんだよ」

なんともないよう振舞いつつ、自分を落ちつかせるために僕はミネラルウォーターに口をつける。

「声かけてみた」

「ンツグ!？」

一言でむせた。

ゲホゲホと咳をする。

くつくつと僕の無様な姿を見て笑う新沢を、僕は睨む。

「お前分かりやすすぎ。カマをかけたただけなのによ」

「うるさい。……カマをかけただけってことは声はかけてないんだよな?」

「いや、それは本当」

「……………」

僕は思わず黙り込む。

正直、想定外だったのだ。裕香が別の男子にとられることなんて

考えて

……とられることなんて？

とら、れる？

……何を言っているんだ、僕は。

僕が彼女の側にある理由。それは、彼女を元気づけるためだろう？

別に、僕は恋人でもなんでもない。ましてや、彼女は僕のことを恋愛の対象と見てくれてさえないだろう。

ただ、勉強を教えてくれるいい人。

どんなによくても、友達。そうだろう？

僕は自分を戒めた。

「まあ安心しろよ。声をかけたら華麗なスルーを決めてくれたからさ」

「いや、まあ別にいいんだけどさ……。彼女にとっての何でもないし」

「そんな表情をしながらそんなことを言っても説得力がないな。……しかし、珍しいねえ。お前さんがそこまで入れ込むとは」

新沢は本当に珍しかったのか、どこぞのオヤジみたいな話し方をした。

僕はそれに小さく笑う。

「気になっているのは確かに本当だよ。でも、それは恋慕とか、そういうったものじゃないんだ」

「ほうほう。じゃあ一体何だというんだい？」

「昔の俺に似てるんだ。生きる目的を見失ってるっていうか……」

とにかく、誰かの助力が必要なんだ。昔体験してるからさ、ほっとけないだけだよ」

「……じゃあ、彼女も？」

新沢は明るい表情を一転させ、盛大に落ち込ませる。一々一喜一憂してくれる友人の発言を僕はいや、と否定した。

「いや、俺とは違う。走れなくなっただってさ。それと同時に学生生活のほとんどを病院で過ごすことになったらしい」

「走れない？ 五体満足だったけどな。それに……走れなくなると同時に入院生活を送っているって……？」

「病気なんだから。かなり重いな。だからさ、俺は出来るだけ裕香を元気づけてやるうとしていっているわけだ」

僕の言葉に、意味ありげな笑みを顔に浮かべた。

ん？ 何か僕は言っただろうか……？

「ハハーン。取り合えず、下の名前で呼び合うほどの仲にはなってるってことか」

「……！！」

へびのようにチロチロと笑う新沢。

僕は内心で吐血した。

まるで友達にカマ掛けられて彼女との間柄をうっかりと喋ってしまった主人公みたいな気分だ……。

「べ、別に深い意味はないぜ？ ただ裕香が私のことは裕香って呼べって言ったから……」

「ほっほー。結構お話もしちゃってるんですねー」

「つつつつ！」

墓穴を掘る僕。

破滅の道へと、僕は自分で自分を導きつつあった。

「もう何だよお前！ 帰れ！」

「人間は凶星を突かれるとキレるらしいぜ」

僕の暴言に、くつくつと皮肉な笑みを浮かべる新沢。

かなり嫌味っぽい。

まあ嫌味なんだけど。

「ツクツク。おもしろいなお前は。友達でよかったとつくづく思うぜ。安心しろよ。手は出さないからさ。それじゃあご命令通り帰りますよ。See you」

「二度とくるな！」

怒鳴り声の直後、ドアがしめる音がした。

会話をした直後のその音はやけに乾いていて、少しだけ寂しくな

る。

小さい頃、友達と遊んで別れた後のような感じ。

興奮が冷めてくると、友人のとある言葉が胸に込み上げてきた。

『友達でよかったとつくづく思うぜ』

台の上に丁寧に置かれたジャンプとプリント、ルーズリーフを見て、僕は心中でそりゃこっちの台詞だよ、と呟いた。

穏やかな気分。しかし、同時に何か釈然としないモヤモヤとした気持ちも胸にあった。

『手は出さない』という言葉に安堵していたから。それは、一体どういうことなんだろう。

こんな気持ちの悪い、何物か分からない気分は初めてだった。

僕は戸惑う。このわだかまりの正体がかめめない。

そして、もう一つ。裕香という少女のこと。

裕香は、僕の何なんだろう？

僕は、裕香の何なんだろう？

僕らは、一体何なんだろう？

「他人にあれだけ無関心だったくせに、今更になって考え込むのか、俺は」

自嘲気味に呟き、僕はやるせなく笑った

点滴袋の交換の時間がやってきた。姉ちゃんにしばらくしてから小早川さんとの仲は回復していたが、今は会話がなかった。

原因は僕にある。深く考え事をしており、意識が窓の向こうをさまよっていたのだ。

台に頬杖をつき、窓の向こうをじーつと見つめている僕を、手は休めないまま小早川さんは不思議そうに見ていた。

微動だにしない僕がよっぽどブキミだったらしく、小早川さんは恐る恐る僕の視界を遮った。

「……………」

それでもうんともすんとも言わない僕。完全にマイワールドに入っていて、全然気づかなかった。

「想弥くん」

「あ、小早川さん。どうしたんですか？」

声に意識が引き戻されて、僕はようやく小早川さんの存在に気づいた。頬杖をついたまま、目の前の小早川さんを見上げる。

小早川さんの表情はというと、まるで腕が四本生えた人間でも見たかのような、そんな顔をしていた。

「どうしたんですかって、それはこっちの台詞よ。一体どうしたの、ポーっとしちゃって」

「すみません。ちょっと考え事を……。もしかして、さっきからいきました？」

「いや、二分前ぐらいからだけど。いつもなら勉強していても私に気づくじゃない？ 何を考えてたの？」

「うーん。まあ、いろいろですよ」

僕は曖昧に笑う。そんな僕を小早川さんはやっぱり奇妙なもので

も見るかのように見ていた。何となく次の会話まで間が空く。

「具体的にいいなさいって。お姉さんがアドバイスしてあげるから」
食い下がる小早川さん。浮かべている笑みがちよつとコワイ……。
以前のことを思い出して僕は思わず身震いしそうになる。

得体の知れないプレッシャーを感じ、僕は澁々白状する。……抽
象的に。

「ちよつと悩み事ですよ」

「どんな悩み事？」

果たして小早川さんはその内容を聞いてきた。数パーセントの可能性にかけた僕は愚かだったのかもしれない。

思考を巡らせる。適当で、尚且つ納得してくれそうな嘘を考える。
「友達のことなんで、ちよつと言えないですね……ゴメンナサイ」
苦笑いを浮かべて僕は言う。小早川さんは数秒の間僕の顔じいっ
とを見つめ、それからそう、と頷いた。

僕は嘘がバレなかったことに内心で胸をなでおろす。

「ま、言えない事の一つや二つ、高校生の君にあったっていいよね。
気が向いたら話してよ」

「……た、たははは」

バレていた。

僕はやっぱり誤魔化すように笑う。

恐るべし現役女看護師二十五歳。伊達に何人もの患者と接してき
てないぜ。

気づくと小早川さんはすでに部屋からいなかった。きつと気を利
かせてくれて一人にしてくれたんだらう。

ああ。やっぱり小早川さんいい人だ。悪魔なんて言ってすいませ
ん。

「……………」

僕はベッドに横になった。今度は天井を眺める。

「……………ハア」

深くため息をつく。

わだかまりの正体。それが一体何なのか、新沢が帰ってからずっと考えていた。

裕香が関係しているのは間違いない。

新沢の言葉を聞いたときの妙な安堵感。

それは一体、なぜ？

ずっと考えていて一つ分かったことがあった。何が怖くて人との付き合いを避けるのか。

人との関わり、キズナが怖いんだ。

キズナが深ければ深いほど、それを失ったときに傷つく。

それがとても怖いんだ。

当たり前なんて存在しないことを知っているから。いつかなくなってしまうと知っているから。こんな思い、もう二度としたくない。そう無意識のうちに思っているから。

だから、深入りしないよう心がけた。深入りされないよう心がけた。だというのに。

「僕は何であんなに裕香に深入りしてるんだ……？」

前々から薄々思っていた。僕は、何で彼女とあんなに接しているんだ？

放っておけない？ 違うだろう。僕と似たような境遇の奴なんて今まで何人も見てきた。

分らない。

……怖い。

でも、彼女と接しているときは不思議と心地よい。それはしかし、新沢や姉ちゃんといるときとは少し違う心地よさ。あいつといるときとは違う、妙な喜びと楽しさがある。

ふと、友人の言葉が浮かぶ。

『しかし、珍しいねえ。お前さんがそこまで入れ込むとは』

ああ……きつと、そうなんだろう。少なくとも、片時も忘れることがないぐらいには僕は裕香のことを想っている。

そう。あの時、外で彼女が僕を待っていたとき、僕は彼女に魅了された。

僕はその時、恋慕なんかじゃなくて放っておけないだけだ、と言った。放っておけない。それも間違いじゃない。けれどそんなことよりも、その細くて儂げな姿に僕は虜になった。

認めねばならないだろう。このわけの分からない感情の正体が何であるか。

まだこんな感情があったのか、僕の中にも。なくなったと想っていた、こんな感情が。

僕は彼女に恋している。

/ 4

午前中。

いつものようにやってきた裕香はあるものを持っていた。

ルーズリーフとそれ専用のバインダーノート。ご丁寧に名前まで書かれている。

「どうしたの、それ？」

「お母さんに買ってもらったの。想弥くんからずっともらい続けるわけにもいかないし」

誇らしげに言う裕香はそれらを台の上に置いた。薄くなった僕のルーズリーフと新品の厚いルーズリーフが並ぶ。

「そっか。じゃあ、これで四六時中俺がいなくても勉強が出来るな」

「一人じゃやらないよ。よっぼどのことがない限り」

拗ねたように呟く裕香。メチャクチャ可愛い。それはもう殺人的なまでに。

「だよな。楽しくないもんね、一人で勉強したって。教えあいながらわいわいやるのが一番楽しいな」

「そっだよ。そっちの方が絶対に楽しいよ。もう、一人でやるのはいやだし」

「……うん。俺が教えてやるよ」

昔を思い出してしまったらしく、寂しげに笑う裕香に僕は言った。彼女は長い間病院で治療していたんだ。学校に行けない分の勉強は病院でしていたに違いない。

「中学の頃、やっぱり裕香は一人で勉強してたのか？」

「うん。たまに母さんとか父さんがついてくれたけど」

「そっか」

聞いてから後悔する。裕香にとってそれはきつと辛い思い出なは

ずだから。

しかし、裕香の表情はすぐに華やいでいた。予想していた表情とは違うそれに、僕は妙な安堵感を覚える。

「でも、いいんだ。今は楽しいから」

「そうか？　ならよかった。ちょっと安心したよ」

「どうして？」

「もし裕香がつまんなかったらどうしようって思ってたから」

「そんなわけないよ。もしそうだったらこうしていつも来るはずないって」

それもそうだと、僕は笑った。彼女もでしょ、とうれしそうにする。

楽しい、というワードでちらりと学校のことを思い出す。僕は彼女を元気づけようと続けた。

「学校の授業はさ、もっと楽しいぜ。うるさいけどさ、それがいいんだ。裕香も早く退院して学校へ行こう」

いたわるつもりで言った言葉だった。何の悪意もない、ただ元気付けようという気持ちでいった言葉。

だけど、それは全く違う方向へと働いた。

裕香の顔から笑みが消える。何気ない一言は、一瞬で彼女の笑みを奪っただけでなく、空気すらも変えた。

あからさまな彼女の変貌に、僕は自然と戸惑い、恐怖する。

「……行けるかな、私」

「だ、大丈夫だって」

「分かんないよ、そんなこと。私、心臓を患ってるから」

「え？」

心臓。

全身に血を送り出す、いわば人間の核となる大切な臓器。

「拡張型心筋症っていうんだけどさ、心臓の壁が薄く延びて大きくなっちゃんだ。発症してから五年の生存率は大体七割。私は中学一年の時に発症したから後一年で五年になる。その七割に入るか、三

割に入るか。私にはまだ分からないから」

ふいつと彼女は僕から視線を逸らし、かつてのあの無表情で僕に告げた。

「いつ死ぬか分からない、と。」

眩暈がした。心臓がドクンドクンと跳ね狂い、地震でも起きたように体が揺れる。

自分の耳を疑った。信じたくなかった。嘘だと思っていないとやっついていられなかった。

「こんなに身近にも、消え絶えようとするキズナがあったなんて思ってもいなかったから。」

「しゅ、手術は！？ 出来ないのか！？」

「簡単には出来ないよ。心臓っただけで難しいのに、私の場合はさらに難易度の高い手術になっちゃうから」

取り乱す僕とは対照的に、裕香は冷静に答える。

久しぶりに手に入れたキズナ。それに早速裏切られたような気がして、僕はつい熱くなってしまっ。

「どうしてだよ！？」

「私さ、完全内臓逆位なんだ」

「な、なんだよそれ」

「内臓の向きが左右逆になってるの。だから、心臓が普通と違って右側にあるんだ」

笑いながら飄々と言う裕香。だけどその目はどこか虚ろで、何を見ているかわからない。

僕と勉強して笑っていた裕香は再び彼女の内に消え、疲れきったあの裕香が出てきていた。僕と出会った頃のあの裕香が。

「た、助からないのか？」

「このままだとそうなるかも。……だから、今は楽しんでおきたいんだ。残り少ない時間を」

余生は少ない。

彼女は、そう僕に告げた。

「そんなこと、言つなよ」

「いいの、もう」

「……裕香は、生きたくないのか？」

その質問に、裕香は黙り込んだ。僕は何かを言うでもなく、ただじつと彼女がその問いかけに答えるのを待っている。しかし、その沈黙に僕は意味不明な苛立ちを覚え、怒鳴り散らすように叫んだ。

「裕香は生きたくないのかよ!？」

静寂を切り裂く叫び。その後も、裕香は黙つたままだった。

カチ、カチ、カチ、カチ。

いつもなら早く感じる時の音も、今はやけに遅く感じる。

「……たい」

「え？」

やがてか細い声で裕香は何か呟いた。消え入ってしまいそうなくらい、それは小さな声だった。

その声が発せられると同時に、一滴の涙が彼女の頬を伝わって落ちていくのを、僕は見た。

瞬間、僕は死にたくなるぐらい後悔した。なんて、残酷な質問だったんだろう。死にたいわけなのに。生きていたいに決まってるのに。学校に行つて、普通の女子高生としてスクールライフを楽しみたいはずなのに。

僕にとっての当たり前が、彼女にはないって知っていたはずなのに。

「私だつて、生きたいよ……」

「裕香」

「でも、怖い。手術して、もう、目覚めることが、なくて、そのままさよならも、出来ないまま、死んじゃうことが。明日、私はここにいたかも、しれないのに、もっと早く、死んじゃうことが」

彼女は涙声になりながら切れ切れに囁いた。

それらの言の葉はひらひらとゆれ落ち、僕の体を切り刻む。
ヒック、ヒックと彼女は嗚咽する。それらすらも、僕に突き刺さ
っていく。

でも、こんな傷は受けて当然だった。僕は、最低だ。自分勝手に
裏切られたと思って、彼女を傷つけて。何が元気づけるだ。彼女を
僕よりもさらに深く傷つけただけじゃないか。

「死にたく、ないよ……」

最後に、彼女はそう呟いた。

どうしようもなくて、言葉じゃ何も出来そうになくて。

だから、僕は行動に出た。嫌われてもいい。ただ、もうこれ以上
何も言つてほしくなかったから。自分自身を傷つけないでほしかっ
たから。

「
」
彼女が息を呑むのが分かった。だけど、僕は敢えて気づかないふ
りをする。

強く、強く。壊れてしまふんじゃないかというぐらい強く、僕は
彼女を抱きしめた。

彼女は酷く細くて、本当に壊れてしまふんじゃないかと思うぐら
いだった。その細さが、尚も彼女を愛しくさせる。

やがて、彼女の方も僕に身を預けてきた。嗚咽するたびにゆれる
彼女の体を、力を緩めて今度は優しく抱きしめる。

どうしようもなくて。

かける言葉がなくて。

何も考えられなくて。

ただただ、僕は彼女を抱きしめた。

思いは涙という形になって僕の目の前に現れる。
生きたいという、強く、切ない思いが。

いつ死ぬか分からないという、恐怖が。

それらを見たくなかった、というのも一つの事実。

だけど、そんな恐怖よりも何より。

この小さな裕香という女の子を、僕が守ってあげたいと強く思ったんだ。

どれくらい経ったのだろうか。依然として、僕は彼女のことを抱きしめたままで、裕香は抱きしめられたままだった。

肩の震えは　　もうない。嗚咽も、もう聞こえない。

だっていうのに、全然放す気になれなかった。ずっと、こうしていたかった。

彼女は、僕に自身の秘密を打ち明けてくれた。それに一体どの程度の勇気が必要だったのだろうか。死と隣り合わせ。もちろん、そんなの生きていれば当然だと言えるけど、彼女の場合はより近いところにいる。

自分がそこにいたら、どうする？　出来るだけ、考えないに決まっている。それはただの臆病だろうか？　僕は違うと思う。

死を恐怖するのは動物の基本本能だ。それに抗うことは出来やしない。

死にたくて生まれてくる奴がどこにいる。

「僕さ、中二の頃に両親が死んでんだ」

「……………」

裕香は何も言わない。僕は構わずに続ける。

「普通の朝だったんだ。朝、夜更かししてて寝坊して。親の料理してくれた飯も食べないで慌てて家飛び出して。……本当、普通の朝だった。」

僕の両親は共働きでさ、一緒に仕事に行ってた。たまーに喧嘩なんかもしていたけど、まあ仲のいい夫婦だったと思う。やたらと注意してきてさ、うざいなんて思ったこともあった。

ホント、あっけないよ。命って。トラックを飲酒運転していた奴が突っ込んできて、二人とも即死だったってさ。状態もとて

も酷かったらしくて、死体すら見せてもらえなかった。

うざかったけど、大切な人たちだった。とても、僕の中で重要な人たちだったんだ。……それ以来、僕は“親友”を作らなくなった。人との関わりも、なるべく避けた。それでさ、僕の周りには、本当に大切に思えるような人は、あまりいなくなっただ。

もう、数える程しかない。

姉ちゃん。

新沢。

それと、多分衣川も。

「僕は、弱い。傷つかないよう、自分を守って繋がりを拒絶している。それでもさ、何か、裕香だけは違っただ。」

そう。あの一瞬。強い輝きを放つ目を見て。

僕は、魅入られた。

「間違っただけが裕香の部屋に入ったとき、キレイだと思っただ。いや、姿とか顔とか全然見れなかったんだけど……裕香の目、とても力強くてさ。ホント、キレイだった。」

臆面もなくそう言った。純粋な思い、素直な意見。そうして、事実。

何も恥らうことなんて、ないんだ。

「プリント返してくれるとき、初めて裕香を見ただけ……正直、見惚れた。とっつても、可愛かった。」

その時が、分岐点。

僕は彼女に、恋をした。

いや、もしかしたらその前。あの、暗い部屋で見たときから、惚れていたのかもしれない。

「勉強教えられることになって、本当にうれしかったんだ。……繋がりをおそれていた僕が、人と関わりを持ってうれしかった。」

裕香との出会い……否、裕香が。

僕を、変えてくれた。

「あの事件以来、初めて出来た大切な人。言い訳をするわけじゃな

いけど、その繋がりがとても脆いと知って、ショックだったから、ついカッとなった」

僅かに、裕香が動いた気がした。

僕はそれに気づかないふりをして続ける。

「だけど……うん。それぐらいじゃ、やっぱり気持ちは変わらないみたいだ。」

少しだけ間を空けて、

僕、裕香のことが、好きだ」

そう、呟いた。

ああ。もうここまで言っちゃまったんだ。それに、ここまで想う人に出会うことなんて、もうない。僕なら尚更に。

後戻りなんて、出来るわけないだろう。

「僕と、付き合ってください。出来れば、一生。“僕の命が尽きるまで”」

それは呪いのような告白。でも、本当の思い。

ふられるかな、と身構えて僕は苦笑した。だって、それは当然のこと。彼女の想い人は、他にいる。大体、台詞が臭すぎる。一生？

馬鹿じゃねえか、僕。ああ、馬鹿だ馬鹿。

でも、そうと分かかっていても不思議と後悔はなかった。むしろ、大きな仕事をなしたような達成感すらする。

そんな曖昧な思いに浸っていると、裕香が突然笑い出した。僕はわけが分からなくて、やや間を空けてようやく恥ずかしくなってきた、不機嫌になって言う。

「なんだよ、そんなに笑うことないだろ。確かに普通の告白じゃないけど」

「違う違う」

彼女が僕から離れる。涙の跡が少し痛々しかったけど、表情は晴れやかで未だにくすくすと笑っている。

「想弥君、一人称が僕になってるんだもん」
「っ!!」

し、しまった!

うっかりしてた!

小さい頃の癖が出てしまった!

くすくすと笑う裕香を見てどんどん恥ずかしくなる。ああ。ああ

! 誰が僕の記憶を消してくれ!

「僕……僕、か。うふふふ」

「そ、そこまで笑わなくなっただっていいだろ! 小さい頃の癖が出ちゃったんだよ」

「僕でいいのに。そっちの方が可愛いよ」

「高校生にもなって僕なんて恥ずかしいだろ。それに、可愛くなんてねえよ」

あれほど気をつけていたのに。喋るときには『俺』を使っつて、いつも意識していたつもりなのに……っいつかりしてしまった。

ああ。知られたくなかったことを知られてしまった……。まだ裕香はくすくすと笑っている。

そう、僕が落胆していると唐突に、

「いいよ」

と言った。

脈絡のないその言葉に僕は首をかしげる。

「どういうこと? いいよって」

「だから、その……さっきの返事」

もじもじと、彼女は恥じらいを含んだ表情のまま言う。

その姿が、殺人的にまでに可愛くて、一瞬言葉の意味を考えるのを忘れてしまった。が、途端に僕は目を見開く。

「一生側に居られるか、分からないけど。でも、出来るだけ長く、
ね」

頬に赤みを残したまま、笑って彼女はそういった。

な……でも、それって、つまり……。

「手術、受けるってことになるんだぜ……？」

「……覚悟はまだ出来ない。けど、決心が出来たら、いつか……」
少しだけ苦笑ってから、彼女は一切の嘘もなく、自分の本当の心をありのままに気持ちを僕に打ち明けてくれた。

ああ。それでもいい。いつか、手術を受ける決心がついたときでいい。そう思ってた僕は笑った。それがどう伝わったかは分からなかったけど、彼女は頬を赤くして笑った。

僕が他人と付き合えたのは、彼女のおかげなんだ。なら、僕も彼女の決心の後押しをしてやろう。

そんな密かな野心を、彼女の笑顔を見つつ密かに燃やすのだった。と、ここで

「裕香ちゃん、いつもの診断を」

……え、ええと、この看護師さんは佐々木さん？ だっけか？

僕とはあまり親しくない看護師さんだ。

まあ、そんなことはどうでもいい。ひとまず、今の状況を整理してみよう。

人物。裕香と向かい合って座る僕。そして、何故か裕香の頬には涙の跡。場所。裕香の病室。状況。二人きり。

僕はあまり興味がないけど……衣川の言葉を借りて言っと、死亡フラグってやつが立ったかな……？

佐々木さんは目を点にしてこちらを見ている。うん。僕だけを。

さあ、どう説明しようか。僕は困った状況だというのにどうしてか、頬のニヤつきを抑えることが出来なかった。

Chapter 2 そこにある意味 / 5 (後書き)

し、失礼しました！

ええと、誤つてとらぶるきゃっちゃーの続きをこちらの方へと連続投稿してしまいましたorz

お騒がせして申し訳ありません><

本当にすいませんでした。

外出許可は未だに出ないのだけど、どうやら病院の庭は自由に歩き回っていらしいので、僕“ら”は外を歩いていた。

空は依然として鉛色。どんよりと重そうにゆったりと流れる雲からは、まるで毒気を抜かれたかのように真っ白な雪がしんしんと降っていた。

いる場所は同じはずなのに、雪化粧した町はまるで今まで住んでいた町とは違って見えた。例えば、アスファルト。黒い部分はすっかり雪に埋められ、その姿をすっぽりと隠してしまっている。家やマンション、ビルにも雪がかり、所々白い模様が浮かんでいた。

僕はそのことをやや興奮気味に話し、裕香はそれを楽しげに聞く。「久しぶりの雪だからさ、ホント、別の町に来たみたいだよ」

「へえー。そうなんだ。関東って結構雪が降るイメージがあるけどな」

「降りはあるけど、ここまで積もるのはあまりないかな。いつもはちょっとしか降らないんだ。裕香の地元は結構雪降るのか？」

「私の地元もそんな感じ。とてもたくさん降ることはなかったかな」手を伸ばし、降ってくる雪をその手にそっと包む。そんな何気ない姿さえ優雅で、僕は目を奪われてしまう。

そんな僕の視線に気づいたのか、ハツとしたように彼女は俯いてしまった。

「な、何？」

「いや、なんでもないです……」

一応、僕と裕香は彼氏と彼女という関係である。だけど、まだなんかぎこちない感じだ。

手を繋ぐことをためらったり。

やけに見つめられることを恥らったり。

僕はなんだかなー、とやるせない笑みを浮かべた。

「あの、さ」

「ん？ 何だ？」

「想弥くんは、私といて楽しい？」

視線を逸らし、頬を赤く染めてもじもじと言う。僕は本当に意味のない質問に呆れて、言葉さえ出ない。

「あさまし」

「え？」

「重要古語単語の一つ。意味はなんでしょうか？」

ええと、と考え込む裕香。いきなり質問されたのでぱつと答えられなかったようだ。

もごもごと裕香はその問いの答えを口にする。

「驚き呆れる、とか興奮めだ、とかかな」

「正解。そして、それが今の俺の心情。言っただろ。俺は対人恐怖症があるんだ。そんな俺が付き合いたいと思ったのは、裕香といえるのが楽しいからに決まってるだろ」

「でも、私まだ手を繋ぐことだって出来てないのに」

しょんぼりとした様子で裕香は言った。どうやら、本人も気にしていたらしい。俺はそんな様子が微笑ましく、明るく笑った。

「別に、手を繋ぎたくて一緒にいるわけじゃないし。……そりゃ、欲を言えば繋ぎたいけど、裕香が嫌って言うことを無理強いするつもりはないんだ。ただ、好きだから一緒に居ればそれでいいんだよ、俺は」

好き、というワードに反応したらしく、裕香はみるみる赤くなっていく。

……やっぱり、可愛い。本当に、思い切り抱きしめたくなくなるくらい、可愛い。

そんなことをしたら、今度こそ彼女は本当に倒れてしまうかもしれない。……今気づいたけど、これって心臓に悪いんじゃないか？

なんて不安を感じたとき、ひんやりとした感覚が右手を包んだ。僕は驚いて彼女の方を見た。

そこには、やっぱり顔を真っ赤にして俯く裕香がいた。彼女の左手は、しっかりと僕の手を握っている。

「ゆ、裕香？ その無理しないでいいんだぜ？」

繋ぎたい、なんて言っておいて僕はかなりきよどつていた。不覚にも心臓の鼓動のペースが速まる。

裕香の方はというと、やっぱり顔は真っ赤のままだったけど、もう俯いてはいなかった。緊張は……しているだろう。

「その、冷えるから」

キュツと手を握る力が強まる。僕はそれに少し驚いて、そうしてゆっくりと握り返した。

ぎこちなくなつていい。こうして、ゆっくりと一歩一歩彼氏彼女として付き合えるようになっていけばいいんだ。

僕はそう思い直した。

「温かいね」

「うん」

「そういえば、俺、裕香の気持ちは一回も聞いたことなかったな」

「え？ そ、そんなことないと思うけど」

「いや、ない」

きっぱりと言う。もうそれ以外の答えは許さないと言わんばかりに。

裕香はもどかしそうに口をぱくぱくとさせるけど、言葉が出てきていない。

と、何か思いついたのか、急に彼女の顔が華やいだ。それはもう、手を繋いだことすらも忘れたかのような満面の笑み。

「“僕”は君が好きです、って言ったら言っただけあげる」

「！」

ある意味、それは彼女の目の前でさらしてしまった一生の恥である。

彼女は残酷にもそれをもう一度さらせ……いや、見せてほしいと
いつてきた。

そうして、その代償は彼女からの僕への気持ちを口にする事。
プライドをとるか、彼女からの気持ちをとるか。選択肢は二つ。
取れるのは一つ！

そうして僕は

「……僕は君が好きです」

と、恥を忍んで呟いた。が、裕香はそれが不満だったのか、ムツ
と顔をしかめてしまう。

「もっと自然に」

「……無理」

「じゃあ言わない」

僕はうな垂れる。あんまりだ。あんまりすぎる。確かに、言い方
は不自然だったかもしれないけど、一応言いはしたんだ。恥を忍ん
で、頑張ったんだ。

今の僕の様子が酷かったのだろうか、裕香が少しだけ慌てて言う。
「わ、私だって言うの、恥ずかしいんだから……！ 想弥くんもそ
れなりに恥ずかしいこと、言つてよ」

「んー」

確かに、それは理にかなっている。一物からは一物しか得ら
れない。

虎穴に入らずんば虎子を得ず、だ。

「僕は、君が好きです」

出来るだけ、自然に。

僕はそう言った。

ちらり、と彼女の方を見る。裕香は俯き、肩がわなわなと震えて
いた。

「裕香！？」

心臓が痛むのか、と不安になり僕は彼女の顔をしゃがんで覗き込
んだ。が、僕の目に飛び込んできたのは別の意味で苦しそうにする

裕香の表情だった。

くすくすと笑っている。本当に楽しげに。

僕は安心してへなへなと力なく座り込んだ。

「し、心配させないでくれよ。心臓がどうかしたかと思ったじゃないか」

「うふふ。僕、か。僕ねえ。うふふふ」

まだ笑っている。どうやら、『僕』は彼女のストライクゾーンらしい。僕としてはそれはあまり好ましいことではなかったのだけど、彼女の笑顔に毒気を抜かれて釣られるように僕も笑った。

でも、最低限のプライドは守っておこう。

「もう絶対に言わないからな。無理して言わせておいて、そんなに笑うなんて酷いぜ」

「ふふふ。ゴメンゴメン。そんな拗ねないで」

「それよりも、俺はちゃんと言ったぞ。約束だろ。気持ちを聞かせるって」

「うん。私も、好きだよ」

臆面もなく、花のような笑顔を浮かべたまま彼女は言った。

「あの日、いきなり入ってきたときから気になってた。私の質問に素直に答えて慌てて帰っていった……どんな人なんだろうって、ずっと思ってたんだ。だから想弥くんの友達がプリントを落としたとき、ようやく関わりを持てる、なんて思って、ご飯食べてからすぐにあなたを待ったの。」

そういった意味で、私たちはホント同じ時期に、恋に落ちたんだね

嬉しそうに、楽しそうに笑う彼女は、周りの雪すら霞んで見えるぐらい本当にキレイだった。

僕は少し照れくさくなって目を逸らし、空いてる方の手で頬を掻いた。

もちろん、その間にも雪ははらりはらりと落ちてくる。その様子は、桜が散るのを連想させた。そこで、あることを思いついた。

「外出許可が下りたら、連れて行きたいところがあるんだ」

「連れて行きたいところ？」

どこ、と首を傾げる裕香に僕は秘密、と笑う。ふくれつつらになる裕香を横目に、僕は早く外出許可が下りることを願った。

Chapter 3 思わぬ来訪 / 1

Chapter 3 思わぬ来訪

/ 1

12月。

いよいよ本格的に大雪になり、外の散歩すら出来なくなってきた。これじゃあ外出許可が出てもあの場所へ連れて行くことなんて出来ないなあ……。

と、言うものの、そもそも医師からは一向に外出許可が下りる様子はなく、晴れていようが連れて行くことは出来なさそうなのではあるけど。裕香には秘密のままずっとお預け状態である。

しかも、小早川さんがいらんことをしてくれたようで、病院中の看護師や医師さまが僕と裕香が付き合っているということを知っている。これがもう凄まじいスピードで広まり、手の打ちようがなかった。裕香の存在は院内でもとても噂になっていたらしく、もともと有名人だったこともあってとのこと。

結果、裕香は恥ずかしさのあまり泣き出してしまったり。

……小早川さん、なかなか焦っていて、ごめんねを連発していたっけ。僕はもうちょっと引張って苛めてやってもいいと思っただけど、裕香はやっぱりそういうことが出来ないようで、すぐに許してしまった。

口が悪いかもしれないが、コレぐらい言ってもばちは当たるまい。ザマーミロ。

まあ、僕としてはしゅんとした小早川さんが見れたのでまあ満足ではあったのだが。

以来、僕たちの関係をはやし立てることもなく、おとなしくしている。当然だ。これでまた何かするようならただの馬鹿だもんな。

何ていうか、小早川さん。僕のこと怒ったりしてたけど、実は結構なお転婆娘だったのではないだろうか。

……というわけで、まあ僕までもが一躍病院内の有名人となってしまったわけだが、逆に言えばこれで堂々とイチャチャ（別にそんないやらしいことはしてないけど）と出来るようになったわけだ。

だから、という接続詞は多分おかしいんだろうけど、僕らは今裕香の病室で勉強会をしている。

『授業』がいつの間にか『勉強会』になってしまったのは、裕香の頭がよすぎるためである。いや、才能ももちろんあるんだけど、それ以上に努力が半端ない。以前僕の貸した数1、数2、英語の問題集を買ってもらったらしいルーズリーフを全て使って解き終えるという凄まじいことを平然とやってしまったのだから。

ようするに。

教えることがなくなってしまったのだ。それどころか、

「なあ裕香、コレ、どうすればいいか分かる？」

「ん？ コレ？ ええと、これは……」

僕が教えてもらう始末である。

これはこれで思うところがあるんだけど、まあ別に不服には思いはしない。むしろ喜ばしいことだ。

一緒に問題を眺め、分からないところは教えあう。最高の関係じゃないか。

「……だからこのviewって単語が先行詞になって、このthat以下の下線部が修飾してるんだと思う」

「はっはあ……なるほど。よく分かった。ありがとう裕香」

「どういたしました。……ところで想弥くん」

解法を教えてもらったところで裕香は改まったように話しかけてきた。それに応じて僕も改まったように答える。

「何？」

「……いつになったらその連れて行きたいところに連れてってくれるの？」

率直に言う裕香。目には涙まで浮かべている。

「……ヤバイ、ここまで笑われるとは……ていうか、ここまで馬鹿にされるとは……。俺だってちょっとは傷つく。」

かあと顔が赤くなるのが自分でも分かった。

「き、聞き分けのない裕香をなだめようとしたんだろ！　そこまで笑うなよ！」

自然と大きな声になる。が、裕香はまだおなかの辺りを押さえ、笑いを堪えていた。

「……ヒドイ。こんな僕でも一応自尊心なるものが存在するのだ。つまり、傷つくのだ。」

何？　あなたは僕をでくの坊か何かとお思いで？　だとしたらそれは大きな間違いです。僕は普通の男子高校生です。

きつと、自分でも情けない顔をしていたのだろう。裕香が唐突にあ、という顔をして謝ってきた。

「う、ごめんごめん。そ、そんなに落ち込まなくても……」「……俺にも一応、自尊心があるってこと、分かってくれ」

彼女に笑われるって、嫌なものなんだ……。

裕香だって、俺に笑われたらきつと嫌だろう。

「う、ごめんね。……でも、想弥くん、かわいいんだもん。つい笑っちゃった」

「……今度から程ほどにしてくれ。俺、結構傷つきやすいんだぜ、これでも」

「……我ながら現金だ。そして、不純だ。裕香の謝る姿が可愛かったから許すなんて。いやでもアレを見せられたら誰でも……。ってか、こんなんでいいのか僕。」

そんな葛藤をしていると、カラカラという音。もう関係はバレているので別にこの光景を見られてもそこまで恥ずかしいわけではないが、おなかがすいたので戻るとしよう。

「ご飯、運ばれてきたみたいだね。俺もいったん戻るとするよ」

「うん、わかった」

一度終わったことは引きずらない。それが僕たちのなかの暗黙のルールだ。

裕香に軽く会釈してから部屋を出る。

音は段々と近づいてくる。もちろん、そんな音、病院では日常茶飯事だし、音に反応して振り向いたわけではない。後ろを向いて歩く人間なんていないだろう。いや、記録とか作るうとしていいるちょっと変わっている人とかは除いてだけれども。

ふいっと、振り向く。

そうして、僕は意外な人物を目にした。

あたしは夏が嫌いだ。

厚着をすればいいだけの寒さと違って、暑さはどうにもならない。だから、不愉快な気分にならない冬は夏に比べればまだ好きだった。

「……最悪だな」

小さく、看護師さんに聞こえないよう呟く。

だけど、今日限りで冬も嫌いになりそうだ。

理由？ そんなの簡単だ。

大雪が原因であたしが見えなかったらしい。友達とのシヨッピングの帰り、道路を渡っていると乗用車があたしを跳ねたのだ。

結果。全治一週間の骨折。不幸中の幸いと言うべきか、犯人は常識人で、すぐに警察に自首してくれたうえ、ちゃんと救急車も呼んでくれた。

そんなわけであたしは今、からからとあたしの病室へと運ばれている。

骨折した箇所は足。つまりどういいうことか。……あたしはこれか

ら一週間、もしくはそれ以上、ベッドの上で過ごさねばならないのだ。車イス、という手もあるけど、全身打撲したみたいに痛んで、とてもじゃないけどそんな気は起きなかった。

「はあ………」

本当に、今年についていない。彼氏は失うは、車に引かれるは……。

……何で、あたしは彼をふっちゃったんだろう。確かに、あまり私に興味を示してはくれなかったけど、悪い人じゃなかった。両親をなくして、あまり人と関わりたがらないということも聞いた。だっていうのに……。

「はあ」

今日何度目になるか分からないため息をついた。きっと、今年は何年なんだ。でも、もうすぐ一年が終わる。来年になれば、きっと変わる。

そんな希望を抱いたときだった。

がらつとドアが開く。

人間とは不思議なもので、別に興味がなくても音とかには無意識に反応してしまうのだ。

例え、それが些細なものでも。

今の私を振り向かせるには十分過ぎる音だった。

そうして、私は信じられない光景を目にした。

「……え？」

思わず声を漏らす。同様に、その目の前の彼もまた、声を漏らした。

私の目には、そのふった元カレがいた。

僕の目の前には、怪我をして運ばれている僕の元カノ、
雪田静江ゆきた しずえがいた。

Chapter 3 思わぬ来訪 / 1 (後書き)

三ヶ月ほどの放置、今更ながら謝らせてください。
申し訳ありませんでした。

えーと、現在、非常に現実の方が忙しく、手をつけられない状況と
なっています。

再び手をつけられるのがいつになるのか分からない状態で、本当に
申し訳なく思っております。

途中で書いた小説を放り出す、という行為がどれだけ今まで読んで
いただいた方を失望させるか、自分は重々分かっています。必ずこ
の作品を完結させることを約束したいと思います。

いつになるかは、その、分からないんですけれども。

でも、いつか必ず完結させます。

現実の方が一段落するまで少しお休みさせてください。
それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9724f/>

繋がれた手 Beautiful day, beautiful life

2010年10月10日02時32分発行